

福井大学留学生センター

# 外部評価報告書

平成15～18年度

福井大学留学生センター

平成20年6月

# 外部評価を受けて

留学生センター長 中川英之

福井大学留学生センターは平成20年2月に管理運営、教育活動、学生支援活動、研究活動、社会貢献活動の全般にわたる外部評価を受けました。平成15年4月に留学生センターが学内共同教育研究施設として設置されてから5年が経過し、新たな改革に踏み出す前に、現状を把握し、外部の有識者の評価を受け、今後の中期的なセンター改革の指導原理を見出して行きたいという思いから、外部評価を受けることになりました。「何を成し遂げようとするのか」について真摯冷静に考えていくときの基軸を、外部評価委員の諸先生方のご意見を参考にして、見出していきたいと考えています。今回の外部評価は4名の委員にお願い致しました。ご多忙の中、また、遠方から評価委員会にご出席頂き、深甚の感謝の念と共に、委員の方々の本学留学生センターにお寄せ頂いた想いを無にするようなことがあってはならないという緊張感を抱いております。

今回の外部評価は、平成19年9月にまとめられた本センターの自己点検・評価報告書に基づいて実施されました。これは、本センターの現状と課題を、平成15年度から平成18年度までの4年間にわたる活動実績を自己点検・評価することにより、取りまとめたものです。平成19年12月21日に、4名の評価委員の来学を仰ぎ、施設見学およびヒアリングを実施しました（第1回外部評価委員会）。施設見学では、留学生センター及びその分室・ラウンジに加えて総合図書館及び総合情報処理センターを見て頂きました。時間の都合で国際交流学生宿舎と留学生会館の見学は省略しましたが、留学生の学習環境の概要は理解頂いたものと思っております。ヒアリングでは、自己点検・評価報告書（評価委員にはあらかじめ送付）を基に質疑応答が行われました。その後、平成19年2月までの間に、各評価委員から「外部評価調査表（全体及び専門分野に関する評価と意見）」をご提出頂き、2月29日に第2回外部評価委員会が開催されました。3時間にわたり、若良二委員長（鳥取大学国際交流センター長）の議事進行の下で熱のこもった議論が展開され、疑問点に関する質疑を経て、評価出来る点と改善を要する点の整理が進められました。留学生センターの活動に関して、“留学生に対する日本語プログラムは質・量ともに充実しており、良く工夫され、十分な教育効果を挙げている”、“日本語仮名学習教材CALLの開発とWeb公開は特筆すべき教育研究業績である”、“留学生相談、就職支援、帰国留学生同窓会支部設置、ネットワーク誌“こころねっと”の継続的な発行、日本人学生との交流推進など模範的な活動が展開されている”、“多様な情報ネットワークを構築し、国際交流、人材育成や学校教育など地域社会との連携活動には顕著なものがあり、実績を大いに挙げている”等の高い評価を頂きました。一方、改善すべき点も数多く指摘されております。「留学生センターの活動が、大学全体の国際交流活動や国際戦略の中に明確に位置づけられていない」、「国際交流推進機構の中で留学生センターはどのような役割を果たして行こうとしているのか」、「留学生センターの教員間の協働体制を進める必要がある、もっと頻繁に会う、話し合う機会をつくってはどうか。個々の活動は優れていても、それだけでは脆弱であり、危機管理上も問題がある」、「留学生センターの建物や教室確保の問題が放置されているのではないか。日本人学生との交流促進も考慮に入れた建物計画を真剣に検討していくべきである」、「学内に250人の留学生がいることを学内でもっと宣伝し、留学生との活動に日本人学生を巻き込んで行くような工夫が必要である。日本人学生に与える刺激、教育

効果が大きい」等のご意見、ご指摘を頂きました。これらのご意見を参考にして、留学生センターの改革の基軸を構成して行きたいと考えております。

最後に、評価委員の諸先生方には、福井大学留学生センターの今後の発展を見て頂き、適宜のご助言・ご支援を賜りますようお願い致します。本外部評価を実施するに当たり、留学生センター教員、また、資料整理から評価委員会の企画・運営までにご尽力頂いた学務部国際課の皆様には、ここに敬意を表し、厚く御礼申し上げます。

# 目 次

外部評価を受けて

留学生センター長

<b>I 外部評価実施概要</b> .....	1	
1. 外部評価委員の委嘱 .....	1	
2. 外部評価のための基礎資料送付 .....	1	
3. 外部評価委員会の実施日程及び概要 .....	1	
<b>II 外部評価委員会委員長による総括</b> .....	3	
福井大学留学生センター外部評価結果	若委員長 .....	3
<b>III 外部評価委員の専門分野に関する詳細な評価及び意見</b>		
	(外部評価調査表様式B部分) .....	5
1. 管理運営 (留学生センターの概要)	若委員長 .....	5
2. 教育・研究	三浦委員 .....	6
3. 学生支援	瀬口委員 .....	10
4. 社会貢献	広部委員 .....	11
<b>IV センター全体に関連する評価及び意見</b>		
	(外部評価調査表様式A部分) .....	12
1. 若委員長 .....	12	
2. 三浦委員 .....	16	
3. 瀬口委員 .....	18	
4. 広部委員 .....	21	
<b>V 第2回外部評価委員会記録</b> .....	23	
1. 第I部 専門分野に関する評価 .....	23	
2. 第II部 総合的評価 .....	55	
<b>VI 外部評価実施経過</b> .....	66	

# I 外部評価実施概要

## 1. 外部評価委員の委嘱

平成19年11月19日(月)、以下の4名の方々に委嘱状を送付した。

- ◎ 若 良二氏 (鳥取大学国際交流センター長、担当分野：管理運営)
- 瀬口 郁子氏 (神戸大学留学生センター教授、担当分野：学生支援)
- 三浦 香苗氏 (金沢大学留学生センター教授、担当分野：教育・研究)
- 広部 正紘氏 (福井県教育長、担当分野：社会貢献)

※ ◎は委員長

## 2. 外部評価のための基礎資料送付

平成19年11月19日(月)、外部評価のための基礎資料として、以下の資料を外部評価委員に送付した。

1. 福井大学留学生センター外部評価委員名簿及び日程表
2. 福井大学留学生センター外部評価調査表(様式A・B)
3. 福井大学留学生センター自己点検・評価報告書(平成15～18年度)
4. 福井大学基礎資料2006
5. 福井大学留学生センターニュース2006年
6. 福井大学留学生センター紀要第2号
7. 福井大学短期留学プログラム及びシラバス2007年
8. 福井大学留学生センター日本語研修コース修了レポート集2006年度
9. 平成15年度留学生国際シンポジウム報告書
10. 「こころねっと」2007年春号
11. 留学生センターパンフレット2007
12. 福井県留学生だより2007

## 3. 外部評価委員会の実施日程及び概要

### 3-1 第1回外部評価委員会

下記のとおり、第1回外部評価委員会を施設見学及びヒアリングという形で実施した。

日 時：平成19年12月21日(金) 14:00～17:00

場 所：福井大学学生支援センター会議室

出席者：若良二委員長、三浦香苗委員、瀬口郁子委員、広部正紘委員、  
留学生センター長、副センター長、センター専任教員、国際課長、  
国際課留学生係長

当日スケジュール：

1. センター長挨拶
2. 外部評価委員紹介等
3. 施設見学：14：20～16：00
  - (1) 留学生センター
  - (2) 留学生センター分室・ラウンジ
  - (3) 総合図書館
  - (4) 総合情報処理センター
4. ヒアリング：16：10～17：00  
司会：若良二委員長  
場所：福井大学学生支援センター会議室

### 3-2 第2回外部評価委員会

下記のとおり、第2回外部評価委員会を専門分野の評価及び総合評価という形で実施した。

日 時：平成20年2月29日(金) 14：00～17：00

場 所：福井大学学生支援センター会議室

出席者：若良二委員長、三浦香苗委員、瀬口郁子委員（広部正紘委員は欠席）  
留学生センター長、副センター長、センター専任教員、国際課長、  
国際課留学生係長

当日スケジュール：

第Ⅰ部 専門分野に関する評価（14：10～16：00）

各分野、30分を目安として以下の手順で行った。

- ①報告（調査表B表をもとに10分以内）
- ②質疑応答（15分）
- ③まとめ（5分）

1. 管理運営：若 良二委員長
2. 教育・研究：三浦 香苗委員
3. 学生支援：瀬口 郁子委員
4. 社会貢献：（若 良二委員長が広部正紘委員を代行）

第Ⅱ部 総合的評価（16：20～17：00）

1. 第Ⅰ部で残された問題について議論（各委員10分）
2. 若 良二委員長の総括

## Ⅱ 外部評価委員会委員長による総括

### 福井大学留学生センター外部評価結果

若 良二 委員長

福井大学留学生センターの活動に関する外部評価結果について、以下にとおり報告する。

外部評価は、平成19年9月発行の『福井大学留学生センター 自己点検・評価報告書（平成15～18年度）』及び福井大学基礎資料2006などの提出資料に基づき、4名の外部評価委員が以下の項目について実施した。

- センター全体に関連する評価及び意見
  - I 管理運営（留学生センターの概要）
  - II 教育
  - III 学生支援
  - IV 研究
  - V 社会貢献
  - VI その他

さらに、IからVの項目については、それぞれを専門分野とする委員により、

- 評価委員の専門分野に関する詳細な評価および意見

として、詳細な評価を実施した。

評価は各委員により提出された評価書と、それに基づき福井大学において行ったヒヤリング結果を加味して、最終的な評価結果とした。

評価結果の取りまとめに際しては、何れの項目についても、1. 評価できる点、2. 改善を期待する点、3. 疑問点、とすることとした。

外部評価委員とそれぞれの専門分野は以下の通りである。

福井大学留学生センター外部評価委員：

- |        |                |        |
|--------|----------------|--------|
| ◎ 若 良二 | 鳥取大学国際交流センター教授 | ：管理運営  |
| 三浦 香苗  | 金沢大学留学生センター教授  | ：教育・研究 |
| 瀬口 郁子  | 神戸大学留学生センター教授  | ：学生支援  |
| 広部 正紘  | 福井県教育長         | ：社会貢献  |
- ※ ◎は委員長

以下、各評価項目について、評価結果の概要を述べる。

## ○管理運営

留学生用宿舎の充実及び留学生同窓会や帰国留学生のフォローアップ事業など、福井大学の留学生に対する支援体制には特筆すべきものがある。留学生数の増加も順調であり、全学的観点から、一層の留学生支援を期待する。一方、留学生センターの活発な活動にも拘らず、その活動に相応しい学内コンセンサスが得られていない状況がある。留学生センターの現状や活動を広く学内に周知するためにも、平成19年度に設置された国際交流推進機構の役割に期待したい。

## ○学生支援

留学生相談、就職支援、帰国留学生へのフォローアップ事業、さらに留学生支援会の設立などの留学生支援のみならず、日本人学生との交流にも成果を挙げており、他大学の模範となりうる活動を実施している。また、留学生に関わる問題発生を未然に防ごうとする体制の構築に努力している点も評価に値する。今後、これらの事業を一層発展させるためにも全学横断的な協力体制の構築による組織的な取組と実施体制の充実が必要である。

## ○教育・研究

留学生に対する日本語プログラムは質、量とも充実しており、良く工夫され、十分な教育効果を挙げているものと認められる。また、留学生センター教員が留学生教育以外にも、全学共通教育や学部教育及び大学院教育にも関わっているなど、幅広い教育活動を展開していることが評価できる。さらに、日本語仮名学習用 CALL 教材を開発、Web 上に公開し、渡日前の留学生に対し学習の便宜を図っていることも留学生センターの特筆すべき教育活動である。研究に関しては、必ずしも活発に行われているとは言い難い状況ではあるが、留学生センターのミッションや学内での現状を考えれば、相応の努力と実績として評価できる。今後は、留学生センターとしての共同研究体制の充実を図り、各教員の研究成果と共に、特徴のある日本語教材及び専門別テキストなどの開発に成果が現れる事を期待したい。

## ○社会貢献

留学生センターと地域社会や学内及び帰国留学生との情報ネットワークの構築及び人材育成や学校教育など、産官学及び地域社会との連携も顕著であり、社会貢献活動は地域社会で高く評価されている。今後は地域の中核大学として地域社会への積極的かつ主体的な貢献事業の展開を希望する。多岐にわたる地域社会からの要請に応えるためにも一層充実した情報提供と発信力の強化が必要である。

以上、昨年より二度にわたる外部評価委員会の実施を経て、ここに福井大学留学生センターに対する外部評価書をまとめることができた。外部評価委員会を開催するに当たり、中川留学生センター長を始め、関係各位による周到な準備と熱心な議論に対し敬意を表するものである。

本外部評価結果が福井大学の国際交流活動を一層活性化するための一助となれば幸いである。

## Ⅲ 外部評価委員の専門分野に関する詳細な評価及び意見 (外部評価調査表様式B部分)

### 1. 管理運営（留学生センターの概要）：若委員長

#### 1. 評価できる点

- (1) 留学生センターとして、留学生への教育を中心に、共通教育、学部教育、大学院教育などにもセンター教員が参画し、十分な教育効果を挙げており、留学生センターの設置目的を十分に果たしている。
- (2) 各学部・研究科に留学生委員会が設置されている。また、その上部委員会として全学留学生委員会が設置され、留学生に関して十分な議論が出来る体制が構築されている。さらに、留学生センターにも運営委員会が設置されており、留学生の受け入れなど、留学生に関する十分な検討組織体制が整っている。
- (3) 留学生センターには日本語教育を中心として、留学生が大学での学習に必要な日本語を習得するための教育体制と授業カリキュラムが整備されている。
- (4) 留学生の教育のみならず、帰国留学生同窓会支部の設立など、帰国後のフォローアップへの配慮がなされている。
- (5) 留学生センターの社会貢献事業として、留学生を活用した派遣事業、福井県や商工会議所及び各種国際交流組織との連携事業及び学内外の留学生に関わる組織とのネットワークの構築も積極的に進めており、その成果も着実に上がっている。

#### 2. 改善を期待する点

- (1) 留学生センターの業務は、留学生の日本語教育を中心とした教育業務に重点が置かれているのが現状である。今後は、日本人学生の海外派遣や海外の交流協定校及び地域社会の国際化推進への関わりなどが一層求められるものと思われる。留学生センターの将来計画の観点から、センターが今後果たすべき役割について、国際交流推進機構において十分な検討がなされることを期待する。
- (2) 国際交流推進機構の設置による国際交流関係組織の一元化と併せて、現在学内に分散している施設の一元化を実現し、留学生の就学及び生活支援体制の強化を実現することを期待する。また、留学生に関する事業への担当教員の負担を軽減し、より効果的かつ効果的に事業を実施するため、事務職員と留学生センター教員の連携強化を図ることが必要である。
- (3) 多くの大学で留学生センターを国際交流センターに改組する動きがあるが、福井大学独自の国際戦略構想の中で、例えば、国際交流推進機構において、全学的な観点から留学生センターの将来計画について議論する必要がある。
- (4) 留学生センターの業務が留学生教育に重きが置かれているが、それ以外にも大学教育の国際化推進活動（例えば、公募への申請や地域との国際的連携活動など）の中心的

役割を果たす組織とすることについて検討する。

- (5) 留学生センターの運営には、センター長、副センター長、理事、副学長など様々な役割が関わっている上、学内の留学生や国際交流に関する委員会も多岐にわたっているため、大学の国際交流活動全体における留学生センターの位置付けや役割分担などを明確にする必要がある。

### 3. 疑問点

- (1) 留学生センター教員は1名が工学部、4名が教育地域科学部の授業や研究指導を担当するなど、教育面での学部との連携は強いようである。今後、留学生センター独自で地域の国際交流組織と連携した地域貢献事業などを充実させて行く上で支障にはならないか？
- (2) 留学生センター教員の採用及び昇任人事に関する規定及びその手続はどのように行われているか？
- (3) 留学生センターの将来構想の検討はなされているか？また、全学の国際戦略の上で留学生センターは今後どのような役割を求められているか？
- (4) 福井県・福井市など地方行政機関が地域の国際化について留学生センターに期待する点も多いと思われるが、地方行政機関との関係強化に対する具体的な方針はあるか？
- (5) 留学生に関わった事件、事故等についての対応マニュアルはあるか？また、どのような対応がなされているか？

## 2. 教育・研究：三浦委員

(ページ表記は、『福井大学留学生センター自己点検・評価報告書(平成15～18年度)』による)

### 教育活動に関する評価

『福井大学留学生センター自己点検・評価報告書(平成15～18年度)』によると、平成15年の留学生センター省令化を機に、日本語プログラムのクラス数と内容が大幅に拡充したという。学期ごとに改良が加えられ、18年には充実した構成と内容の日本語プログラムが展開されている。

日本語プログラムの各コースは、人的資源、教室、経費などの制限を抱えながらも、非常に良く工夫され、教育成果をあげていることが認められる。また、全学向け共通教育の日本語・日本事情プログラムもクラス編成、内容などにおいて優れたものである。

以下、プログラムごとにコメントする。

### 日本語研修コースと日本語研修特別コース

#### 1. 評価できる点

年々カリキュラムが安定し、コース修了試験の成績を以って全学向け日本語コースのクラス分けができるようになったという。これは「コース終了時の達成度がある程度一定の水準

を保てるようになってきた (p.22)」ことを意味する。担当者の努力の賜物であろう。

日本語研修コースの研究留学生数が非常に少ないことに対する方策として、研究留学生受け入れを後期のみ限定し、教員研修留学生と合同クラスでおこなう体制にした (p.18) ことは、ひとつの例として他大学の参考にもなるだろう。また、「特別コース」として午前中だけ日本語研修コースに加わる学生の存在は、人数を増やすことのみならず、多様な学生の存在というメリットがある。

平成18年度から、研修コース受講生に対し渡日前に「かな教材」を送付し始めたという。(p.24) ゼロ初級で来日し、わずか半年で専門領域の研究を始めなければならない研修コース生にとって、来日前の予習は時間の節約ともなり、来日後の日本語習得の速度を速めることになるだろうと期待される。

## 2. 改善を期待する点

自己点検・評価報告書にも年報にも、受講生の修了成績とその評価基準が示されていないので、コースの成果が外部の者にはわかりにくい。

### 短期プログラム (UFSEP)

#### 1. 評価できる点

プログラム開始以来、受け入れ学生数が増加し続け、中国・韓国以外の学生も増えていることは、福井大学キャンパスの国際化に繋がる。そして、修了生の三分の一以上が大学院へ戻ってくるということによって、福井大学の短期留学プログラムへの満足度が高いことが示されている。

「受講者の日本語能力、要望、受講状況を考慮して日本語科目の整理統合と増設を繰り返し実情に即したカリキュラム編成を行ってきた (p.26)」結果、きめ細かいカリキュラムが展開されている。そして、良好な出席率と成績によって、教育の成果があがっていることが示されている。

日本事情クラスや受講者数の少ない日本語中級レベルは、全学向けコースとの合同授業体制をとって調整するなどの工夫がなされた。

#### 2. 改善が期待される点

受講者が1～2名である「はじめての作文」のようなクラスに関しても、全学向け日本語コースや日本語研修コースと合同で行うという工夫があってもよいと思われる。

日本語習得の遅れが著しい学習者に対して、平成15年度に謝金講師が無報酬で週1回90分の補講を10回行った (p.29) ことは、教師側の教育に対する熱心さを表しているとはいえ、無報酬による奉仕に支えられる体制は、改善すべきだと思われる。

### 日韓共同理工系学部留学生プログラム

このプログラムは開設されてはいるが希望者がいないということである。それは韓国人学生の傾向や大学の知名度等の問題であり、留学生センターの責任ではないと言える。難しい

ところであるが、受け入れを実現したいならば、大学の情報を韓国向けに工夫して発信することが肝要であろう。

## 全学向け日本語コース

### 1. 評価できる点

日本語初級、中級などの名称にとらわれず、受講者の日本語レベルに応じた教科書選定、教授方法がとられ、きめ細かい指導が行われているようである。

福井大学の留学生の5人に1人がこのコースを受講し、各クラスの最終試験合格者数は初級、初中級で5割程度である。これは、単位認定もされず必須科目でもないクラスとしては、悪くない結果であろう。

受講手続き、プレースメントテストの時期、受講クラスの決定方法、試験などについて、わかりやすい情報が提供されている。

新学期に遅れて来日する受講生は必ずいるものである。全学向け日本語コースでは、2週間遅れて開講し13週間の学期とすることにより、先に始めた者と後から来た者の差が出ないように工夫されている。ただし、13週間制自体が教育的見地からみて良いかどうかは不明である。

### 2. 改善が期待される点

全学の大学院生等の日本語力を養成するには、わずか4段階のレベル編成では無理があり、1つの段階の留学生の日本語力に大きな差があると推察される。経費の問題が大きいと思われるが、何らかの工夫がほしい。

旧福井医科大学の松岡キャンパスで行われる補講は、人事も経費もすべて医学部が管理運営している。全学の日本語教育を担う留学生センターとしては、人事とクラスの運営に関して権限をもつ必要はないのだろうか。

「専任教員の突発的病気欠勤（p.34）」「専任教員の突発的な病欠・休職（p.37）」「長期にわたる・・・（p.41）」という事態が起こったようである。そのような事態はどこでも起こりうるとはいえ、カリキュラム・シラバスや担当教員の変更、謝金の捻出、それに伴う他のコースの授業数の削減などの大きな負担をセンター全体に負わせ、同時にプログラムのレベル低下を招きかねない。健康管理などの積極的な努力と工夫が望まれる。

## 英語補講

英語力の低い留学生のための英語の授業が行われたが、残念ながら継続的ではない。

## 全学向けの教育——共通教育

### 1. 評価できる点

学部留学生向けの日本語教育プログラムは充実している。日本語クラスのほかに、応用日本語では職場のマナーや企業文化等、日本事情では日本の地理・文化等がトピックとなる。また、異文化／多文化コミュニケーションは日本人学生との共学を実現し、大学キャンパス

の国際化に貢献している。

プレースメントテストを行って、学生を能力別に二分したことで授業レベルに関する学生からの苦情を解消し、より効果的な授業を行っている。

## 2. 改善が期待される点

センター教員はセンター省令化以前の学部専門教育等の科目を担当し、貢献している。しかし、センター教員の本務はセンターの授業であるので、全学への貢献は、あまり大きな負担とならない程度が望ましい。

## 研究活動に関する評価

### 1. 評価できる点

学内競争的配分経費（福井大学重点研究課題競争的配分経費）、科学研究費補助等の外部資金獲得に努力しており、研究会や文部科学省の特別配分で留学生国際シンポジウムなど、留学生センターとしての行事を積極的に行っている。また、福井大学留学生センター紀要を発行し、研究の推進と研究成果の公表に努めている。

福井大学の助成金を得て日本語仮名学習用 CALL 教材を開発し、Web 上に公開して、来日予定の留学生にこのサイトを紹介している点は、研究・開発と教育が結びついた例として評価される。

教員の専門分野が多様で、それぞれ専門分野の研究を発表している。

### 2. 改善を期待する点

総体として、日本語教育に関する論文が少ないと思われる。

各自の専門分野の研究のほかに、留学生センターとして共同で取り組む、日本語教育に関する研究があればよいのではないか。

また、留学生センターとして外部資金の導入に向けた独自の取り組みが必要である。

外部の査読付き学術雑誌に採用される論文数が増えることが望ましい。

### 3. 疑問点

この4年間の研究業績が無い教員もいるが、論文の本数等のある程度義務化することはできないだろうか。

### 3. 学生支援：瀬口委員

#### 1. 評価できる点

- (1) ネットワーク構築型で留学生相談を行うというフィロソフィの下、センターとしても積極的にアドバイスやコーディネーター役を務めて地域、産官学民との重層的な交流活動を積極的に展開していることを評価する。
- (2) 学内外の産官学民をはじめ、学内リソースとしての留学生・一般学生、教職員のネットワークを活用してマクロな視点で相談業務などにあたるとともに個々人を大切にしてい、全学の留学生の顔が相互に見える形でもつなぐ努力を怠らない姿勢、そしてそれを実践（例えば、授業を通して学生のアドレスを知り管理・活用）している姿勢が大きく評価できる。
- (3) その結果、留学生相談のみならず、フォローアップ事業、就職支援、留学生支援会の運営、留学生会の運営などにも大きく影響を及ぼし支援がうまく機能していると思われる。見事である。
- (4) 組織的には、工学部の教授会をはじめ、各種委員会にもメンバーとして参加することで、教職員とのつながり、ネットワークも可能となり、教職員側からの意見も直接聞くことが出来るのは相談部門として非常に有効である。結果として、教職員、学生、及び地域のそれぞれの立場からの考えを知り、アドバイスをを行うと同時に問題点をルールとして取り決めることで、問題発生を未然に防ぐことが出来るシステム創りをしている点も評価できる。
- (5) 留学生センター分室（工学部棟）に相談担当の教授研究室があり、その隣に自由に集える交流室があること、そこにパソコンもあり映画会など定期的を開催して積極的に部屋を活用していることがわかる。
- (6) 海外留学支援、日本人学生・留学生の学内交流活動に対する努力など、留学生と同じ目線で尽力している点で評価できる。

#### 2. 改善を期待する点

- (1) 施設面に関して、留学生センターが部門別に別棟になっているのは、早急に改善していただきたいと願う。留学生の問題は、通常、日本語学習、専門、生活問題等、様々なことが重複している場合が多いため、日常的に教職員間でのコミュニケーションが重要になってくる。コミュニケーションが不足すると危機管理にも重要な問題が生じる。

#### 3. 疑問点

- (1) 日本人・留学生の海外派遣について、交換留学の場合、単位互換はどのような状況なのか。
- (2) 海外留学支援については、学部生に対しては、入学をした時点で海外留学を意識させることも重要であると思われる。例えば、4月の入学式の折、留学生、及び留学生セ

ンターの存在を意識させ、海外留学生を推進する話など入学の挨拶の中に加えているのだろうか。

(3) 留学生と日本人学生との交流活動については、同じ目的で留学生・日本人学生が共同で行う活動は映画会のほか、あるのだろうか。

(4) チューターに対するオリエンテーションなど、直接、チューターを指導する機会はあるのだろうか。

## 4. 社会貢献：広部委員

### 1. 評価できる点

当センターは、留学生の日本理解、留学生および日本人学生の国際性涵養、地域社会や経済界の国際化支援等を主な目的として、交流活動を展開している。

地域交流活動においては、地域社会の国際化を促進するために、小・中・高校での総合的な学習の時間や国際理解教育、あるいは市民交流活動等に対して、留学生を一日講師として年間50件以上派遣している。また、地域の経済界等の要望に応じて、経済ミッション来訪時の通訳団を編成したり、各種通訳や語学研修の講師として留学生を派遣したりしている。

このような交流活動は、地域社会の国際化に貢献しているだけでなく、次代を担う子どもたちの視野を広げ、グローバル化に対応できる人材の育成にも繋がっていると考えられ、大いに評価できる。

#### 【2006年度の主な地域交流活動】

- ・小学校国際理解教育：福井大学附属小、中藤小、西藤小、湊小、松岡小、啓蒙小（14回）
- ・県立学校国際理解教育：高志高、科学技術高、盲学校
- ・地域国際交流活動（地域の国際理解）：14回
- ・地域国際交流活動（留学生の日本理解）：9回

### 2. 改善を期待する点

福井大学留学生センターの地域交流活動がより活発に推進されるように、チラシやポスター等で県内の学校や企業等に啓発する必要があると考える。

例えば、現段階で学校現場が入手できる情報は、県の国際交流協会を通して得られる出張講座講師としての派遣の情報のみであり、一層柔軟で自由な活用を促す情報の提供が望まれる。

ホームページを開かなくても、地域交流活動について自然と人々の目に入るような情報があれば、より多くの人に周知することができ、交流活動が活性化するとともに、留学生にとっても地域の国際化に貢献できる場が増えることに繋がると思われる。

### 3. 疑問点

特になし。

## IV センター全体に関連する評価及び意見

(外部評価調査表様式A部分)

### 1. 若委員長

#### I 留学生センターの概要

##### 1. 評価できる点

- (1) 留学生センターとして独自の教室や留学生用図書及びラウンジを設置し、それらの施設の充実を図るなど留学生サービスの向上に努めている。また、留学生教育の中核となるこれらの施設の利便性の向上と充実にも努めている。
- (2) 英語以外にも、中国人留学生向けに中国語ホームページの開設を計画するなど、留学生センターのホームページの充実にも努めている。
- (3) 全学的な組織である留学生同窓会と各国に順次設置している同窓会支部との連携により、留学生ネットワークの構築を着実に進めている。
- (4) 留学生センター教員がそれぞれ学部及び共通教育に関する委員会に出席するなど、各学部と留学生センターの連携を強化する体制が整っている。
- (5) 留学生センター教員の業務分担は、留学生への配慮が十分に払われたものであり、留学生対応に関する成果が着実に上がっている。

##### 2. 改善を期待する点

- (1) 留学生センター長は教育・学生担当理事の兼任となっており、留学生センターの日常業務は、主に副センター長が実質的に中心となって活動している。留学生センターの活性化を図るためには、センター長の役割や在り方などについて、選考方法も含めた検討を期待する。
- (2) 留学生センターの運営には、理事・副学長・センター長・副センター長などが関わっており、留学生に関する委員会も全学的な委員会から各学部や研究科における委員会まで多種にわたっている。全学的な観点から、留学生及び留学生センターに関する委員会の簡素化を図り、留学生センターが主体的となった委員会組織や運営体制に向けての検討を期待する。
- (3) 配置教員の専門性及びセンターの業務内容から判断すれば、受け入れ留学生に関する業務、特に留学生の日本語教育に重点を置いたセンターとして位置付けられている感が強い。全学的観点からの国際戦略や国際交流活動における留学生センターの関わりや位置付けを再検討すると共に、留学生センターの将来計画についても配置教員数や専門性について業務内容と共に検討することも必要である。

##### 3. 疑問点

- (1) 平成19年度に国際交流推進機構が設置されているが、留学生への日本語教育を担う留

学生センターと共同研究の活性化及び外部資金の導入を目指す他のセンター等が国際交流推進機構を構成することにより、留学生センターの独自性や教育活動の一層の活性化が図られているか？また、他のセンター等との具体的な連携強化は可能となっているか？

- (2) 学術交流協定の締結や教職員及び日本人学生の海外派遣など、留学生を含めた教育・研究活動以外の国際交流活動において、留学生センターはどのような役割を果たしているか？また、大学の国際戦略などの策定に留学生センターはどのように関わっているか？

## II 教育

### 1. 評価できる点

- (1) 日本語研修コースの規模の適正化や授業の効率化を図るため、その実施時期や受講学生の確保に創意工夫を払っている。
- (2) 毎年、受講者へのアンケート調査を実施し、授業の質の向上に努めている。
- (3) 留学生センター教員が留学生教育のみならず、共通教育や学部（教育地域科学部及び工学部）及び大学院（教育学研究科及び工学研究科）での教育・研究も担当するなど、全学的に教育、研究活動に貢献している。
- (4) 共通教育担当科目の時間割や履修方法及びカリキュラムなどに工夫、改善を加えるなど、留学生に配慮した授業の実施に心がけている。
- (5) 工学部との連携により「短期留学プログラム（FUSEP）」を福井大学独自のプログラムとして実施しており、このプログラムは大学院生確保にも大きく貢献している。

### 2. 改善を期待する点

- (1) 日韓共同理工系学部留学生プログラムによる留学生受け入れを実現するための留学生センターとしての積極的な働きかけが必要である。
- (2) 評価できる点とは裏腹にはなるが、留学生センター教員の教育担当について、例えば、大学院、学部、共通教育が過重負担とならないよう、留学生教育とのバランスに一層配慮して欲しい。
- (3) 留学生センターが留学生の英語能力向上への支援をすることは理解できるが、留学センター教員の配置状況から困難な面が多いことが推測される。全学的な協力体制の下で実施する方策について留学生センターを中心に検討して欲しい。

### 3. 疑問点

- (1) 工学部とは「短期留学プログラム」の共同実施などにより教育上の連携が取れているようであるが、例えば、教育地域科学部など、他学部との教育上の連携状況、特に共同プログラムの計画、実施状況はどうか？
- (2) 現行の「短期留学プログラム」の重要性に対する全学的なコンセンサスを図り、今後、他学部を含めて、拡大拡充できるような可能性はあるか？

### Ⅲ 学生支援

#### 1. 評価できる点

- (1) 留学生の就職に関してきめ細かい支援が行われている。特に、県や商工会議所及びJETROなど、学外機関との連携による支援体制が構築されている。
- (2) 外国人留学生支援会を全学組織として発足させ、賃貸住宅における機関保証制度を確立すると共に留学生の不慮の事故に係る対応への強化を図るなど、留学生支援へ積極的に取り組んでいる。
- (3) 留学生同窓会及び留学生会も設立されており、留学生相互の交流事業や日本人学生との交流事業を、学内外の国際交際組織と連携して活発に実施している。

#### 2. 改善を期待する点

- (1) 留学生の相談業務は、指導・相談部門教員を中心に実施されているが、他の留学生センター教員の関わりが不明確である。
- (2) 日本人学生の派遣は「ポスト10万人計画」に位置付けられている我が国の重要な留学生施策であるが、受け入れ留学生の支援に比べて、日本人学生の派遣には、福井大学の明確な戦略性、独自性が見られない。全学的な観点から人的、経済的支援の強化が必要である。
- (3) 留学生と日本人学生の交流推進のためには、日本人学生から主体的に関わることが重要である。留学生センターの支援の下で、日本人学生独自の国際交流組織を強化し、その活動を活性化する必要がある。
- (4) 留学生支援の充実を図るには、地域の各種国際交流組織との連携強化も必要であるが、この点に関する留学生センター独自の取組みを積極的に展開、強化する必要がある。

#### 3. 疑問点

- (1) 留学生の就職支援について、留学生センターと指導教員や学部及び全学の就職担当部署との連携体制はどのようになっているか？また、これらの中で、留学生の就職に最も主体的に関わっている部署はどこか？
- (2) 留学生センター及び国際課と地域の各種国際交流組織との連携及び協力体制はどのようになっているか？また、留学生センターとして、地域との連携を強化するための具体的な方策は検討されているか？
- (3) 教育、研究以外に、留学生センターとして独自の留学生支援事業、国際交流活動は実施されているか？

### Ⅳ 研究

#### 1. 評価できる点

- (1) 留学生センターへの配置後も、センター教員は引き続き研究できる環境にあり、研究の継続性が確保されている。
- (2) 学内競争的配分経費（福井大学重点研究課題競争的配分経費）のみならず、科学研究

費補助金を始めとした外部資金の獲得にも努力しており、研究会や国際シンポジウムの開催も積極的に行っている。

- (3) 福井大学留学生センター紀要を発行し、研究の推進と研究成果の公表に努めている。また、研究成果の授業や地域社会への還元にも努めている。

## 2. 改善を期待する点

- (1) 留学生センター教員の個人研究以外に、学内外及び国内外との共同研究の実施など、より幅広い研究体制の構築を期待する。
- (2) 今後、研究費の確保は一層困難な状況になることが予想されるが、留学生センターとして外部資金の導入に向けた独自の取り組みが必要である。

## 3. 疑問点

- (1) 留学生センター教員の研究費として外部資金を獲得するため、留学生センターとして各種公募事業へ応募した経験はあるか？また、計画はあるか？
- (2) 研究と教育の整合性が求められているが、留学生センター教員の学部、研究科における研究成果は留学生教育にどのように活用されているか？

# V 社会貢献

## 1. 評価できる点

- (1) 留学生を活用した社会貢献事業を着実かつシステムテックに実施しており、地域の中核大学の留学生センターとしての任を十分果たしている。
- (2) 県及び商工会議所などとの連携事業も活発に行われており、人材育成や交流活動への実績も上がっている。さらに、地域の国際交流団体との連携も十分に機能している。
- (3) 帰国留学生のネットワークの外、地域社会や学内組織のネットワークも整備されている上、ネットワーク誌（福井大学）やビジネス情報ニュース（福井県）誌を発行するなど、ネットワークの活用も十分に行われている。
- (4) 留学生同窓会に支部を設立すると共に、その拡充を図るなど、帰国留学生へのフォローアップに努めている。

## 2. 改善を期待する点

- (1) 多くの大学が直面している課題でもあるが、福井県の中核大学として「留学生交流推進協議会」の活用により県、市や商工会議所などとの一層の連携強化を図って欲しい。これはさらに県内の他大学との連携事業の活性化にも繋がることも期待できる。また、県外の大学との共同事業の実施も福井大学のみならず、地域社会の国際化推進にも貢献するものである。
- (2) 国際交流活動への地域社会の期待に応えるためにも留学生センターの社会貢献事業を一層充実させることが必要である。特に、地域社会との連携事業のみではなく、留学生センター独自の社会貢献事業の実施を期待する。

- (3) 留学生センターの社会貢献を一層活性化するためにも他の部署との連携や留学生や日本人学生も巻き込んだ活動が必要である。

### 3. 疑問点

- (1) 学外における国際交流活動を留学生の本分である教育・研究に支障きたすことなく実施するためには、実施時期、時間、参加人数など、実施組織との事前協議が必要であるが、この点に関してどの部署でどの程度行っているか？
- (2) 留学生による社会貢献事業の実施における国際課の関与が不明確であるが、留学生センターとの役割分担はどのようになっているか？

## VI その他

### 1. 評価できる点

- (1) 自己点検・評価報告書の作成や外部評価の実施など、留学生センターとしての活動を総括しながら今後の方向性を模索する努力を払っている。
- (2) 受け入れ留学生に対するきめ細かな指導と充実した相談業務及び留学生情報を蓄積し、同窓会支部の設立や人的ネットワークの構築に活用している。
- (3) 留学生センターとして、学内のみならず、地域社会及び広く国際的に様々な活動を展開しており、着実に成果を上げている。

### 2. 改善を期待する点

- (1) 留学生センターとしての活動は受け入れ留学生が中心となったものであるが、全学的な国際交流活動への留学生センターとして独自の提案や企画・実施はできないか？
- (2) 他大学との連携による留学生センター独自の国際交流事業の実施は考えられないか？

### 3. 疑問点

- (1) 留学生センター予算はどのように決められているか？
- (2) 国際交流活動を今後一層推進させるためには、全学的な理解と協力が必要であるが、このための「全学的なポリシー」は策定されているか？

## 2. 三浦委員

(ページ表記は、『福井大学留学生センター自己点検・評価報告書(平成15～18年度)』による)

### I 留学生センターの概要

#### 1. 評価できる点

平成7年には留学生相談室、平成12年には留学生センター(学内措置)、平成15年には省令施設としての留学生センターが設置され、着実に留学生教育・支援体制の充実が図られてきている。

留学生寮の部屋数が多く、日本人学生と同じ会館に住む環境を提供している等、居住施設が充実している。また、学務部国際課に生活関係の専門職員が配置されていることは、行き届いた生活支援を意味する。指導相談部門による恒常的な支援、海外に多くの拠点をもつ同窓会組織などは、評価に値する。

## 2. 改善を期待する点

センター施設、教員の研究室が異なるビル内に散在している状態では、業務を有機的に機能させるのは困難である。改善が望ましい。

II 教育 様式Bに詳述したので、ご覧いただきたい。

## III 学生支援

### 1. 評価できる点

わずか1名の教員が、細かく行き届いた、多方面からの指導・相談体制を実現させている。「学生支援の考え方」(p.50)の「問題発生を未然に防ぐ」体制、「可能な限り授業を多く担当し学生との接点を構築する」姿勢は、好ましい相談・指導部門のあり方である。

学生ラウンジ、パソコン室など、留学生が日常的に利用できる部屋があり、留学生と日本人学生の定期的な交流活動、パーティーやイベントも行われ、留学生生活を楽しく豊かなものになっている。

### 2. 改善を期待する点

日本人学生の海外留学支援相談(p.57)は、担当者の健康上の事情もあって、相談件数が極端に少なく、実際に交換留学生として送り出す学生も毎年数名にすぎない(p.58)と書かれている。福井大学の理念「・・・国際社会に貢献し得る人材の育成」を実現するためには、何らかの工夫が必要であろう。

IV 研究 様式Bをご覧いただきたい。

## V 社会貢献

### 1. 評価できる点

- (1) 「地域産官学民との重層的な交流活動」(p.66)が社会貢献事業の理念とされていて、指導・相談部門を中心に積極的な交流活動が行われている。
- (2) 地域への留学生派遣、官界や産業界とのネットワーク活動などが活発である。
- (3) 在学留学生のみならず、帰国または在日卒業生の500に及ぶe-mailアドレス網を指導・相談部門がもち、活用している。
- (4) 国際的な留学生同窓会の活動が活発である。
- (5) 教員が個別的にはあるが、ボランティア養成講座、帰国被害者自立支援などに尽力している。

## 2. 改善を期待する点

- (1) 個別的な活動を留学生センターの活動として位置づける方向が望ましい。

## 3. 瀬口委員

センター全体に関連する評価及び意見

### I 留学生センターの概要

#### 1. 評価できる点

- (1) 平成15年に留学生センターが省令施設として設置されるまでの間に留学生担当教員の配置（昭和63年～）、留学生相談室の設置、学内措置として留学生センターの設置、短期留学プログラム開設、「こころねっと」創刊、国際シンポジウム開催など、活発な留学生交流が実施されていた。  
省令施設として設置されてからも、福井大学留学生同窓会大会を皮切りに、各国、地域に支部を設置して、卒業留学生のフォローアップ事業が着実に進められている。
- (2) センター専任教員が関係する学内委員会に各教員が委員として入ることで情報交換がなされ、留学生センターの存在が学内に認識されていると思われる。
- (3) 福井大学学生総数の約5%を留学生が占めているということ。また中国とマレーシアからの学生が受入れ総数の約77%を占めているが、中国からの留学生（60%）もマレーシアからの留学生も中国の大学等との協定校数やマレーシア政府派遣の学生を割合として多く受入れることでいわゆる質のいい学生を受入れていると思われる。

#### 2. 改善を期待する点

- (1) 留学生センターとしてまとまった施設が必要である。現状では、日本語教育等を行う教室すら不足していることが明らかであり、早急に改善を期待する。

#### 3. 疑問点

- (1) 日韓共同理工系学部留学生の受入れに関してなにか尽力しているのだろうか。それとも無理をする必要はないという方針なのか。
- (2) 新入学の留学生に配布する「留学生生活ガイドブック」を発行しているか。

### II 教育

#### 1. 評価できる点

- (1) 留学生センター省令化後は、省令化以前のプログラムに加え全学体制で学部、大学院を含め、多様な授業展開を行っている点を評価する。
- (2) 特徴的なクラス運営として、学部専門教育（教育地域科学部・工学部）も充実している。
- (3) 渡日前にインターネットを利用して「ひらがな」を事前に学習する体制を整えている

ことは、評価できる。また、IT環境が整っていない学生に対しても事前学習としてひらがなのテキストを事前に送り、いわゆるプレオリエンテーションが行われていることが評価される。

(4) 松岡キャンパスでも日本語教室を開講している努力を評価したい。

## 2. 改善を期待する点

- (1) 日本語関係の授業が他の必修科目と重なっていて履修できない場合がある、そのような時は、例えば5限に開講することなど、工夫が必要か。
- (2) 「工業日本語」のニーズも高いようであるが、40名を越す授業では効果が望めない。小規模クラスに分割したり、TAを補助教員として使うような仕組みを工夫してはどうだろうか。
- (3) 事前学習としての「ひらがな」導入について、今後はぜひ、データを取り、研究につなげてほしいと思う。

## 3. 疑問点

- (1) 日本語研修コース・日本語研修特別コースに一般の私費留学生の受講は認めていないのか。
- (2) 漢字教育もレベル別にクラス運営ができないのか。出来ないとしたら、どのような工夫がなされているのか。特に漢字教育について消極的であるように思えるが。教室の問題？理系学習者の学習意欲の問題？経費の問題？

# Ⅲ 学生支援

## 1. 評価できる点

- (1) 留学生相談のみならず、フォローアップ事業、就職支援、留学生支援会の運営、留学生会の運営、海外留学支援、日本人学生・留学生の学内交流活動に対する努力など、留学生と同じ目線で尽力している点で評価できる。また、留学生総数が250人というと全体の顔がわかる限界であると思われるが、その努力も留学生課を含めて学生を支援している点で評価できる。

## 2. 改善を期待する点

- (1) 海外留学を希望する一般学生に対する積極的な働きかけ、また、留学生と日本人学生との交流活動がより活性化することを期待する。

## 3. 疑問点

- (1) 海外同窓会の支部組織のあり方について、国、地域、都市レベルになっているが、なにか意味があるのか。また、各支部と大学（留学生センター）とは、通常はどのようなつながりを維持し連携しているのか。

## IV 研究

### 1. 評価できる点

- (1) 外部資金を得て、それぞれ、独自に渡日前の“かな”学習支援システムの構築したことをはじめ、同じく外部資金を得て「留学生国際フォーラム」「留学生国際シンポジウム」などを開催し、活発に研究活動を行っていることが評価できる。

### 2. 改善を期待する点

- (1) 福井大学留学生センターとして特徴ある日本語教材の開発を期待したい。例えば、専門別テキストの作成など。

### 3. 疑問点

## V 社会貢献

### 1. 評価できる点

- (1) 3つの大きなネットワークを活用して地域、産官学民との重層的な交流活動を展開し、地域社会の国際化に貢献するという大きな理念の下、実践的な社会貢献が行われていることを評価する。
- (2) 学内の事業活動のみならず、地域社会へも積極的にアドバイスやコーディネーター役を務めていることを評価する。

### 2. 改善を期待する点

- (1) 特に地域ボランティア団体との関係など、教員個人のつながりが続くと教員個人の負担が増すのみならず、個人で対応できない時にはそこで関係が希薄になりがちである。留学生センターとして対応できる仕組みも考えていく必要があるのではないか。

### 3. 疑問点

## VI その他

### 1. 評価できる点

### 2. 改善を期待する点

### 3. 疑問点

## 4. 広部委員

### I 留学生センターの概要

#### 1 評価できる点

平成15年度にセンターとして本格的に始動してから、福井大学の留学生の数が飛躍的に伸び（200人）、平成19年5月には250人に達している。これは福井大学約5,000人の5%に当たる。本センターは、日本語・日本事情教育部門と指導・相談部門の2つの部門に分かれており、外国人留学生に対する日本語教育ならびに外国人留学生および海外留学する貴学部学生に対する学習・生活上の指導・助言のための体制の充実が伺える。

#### 2 改善を期待する点

特になし

#### 3 疑問点

日本語と英語以外の言語に対応できるのか。

### II 教育

#### 1 評価できる点

福井および近隣の大学および大学院の外国人留学生に対し、日本語・日本事情教育のためのプログラムを開設しており、多様な外国人を受け入れる体制ができている。

#### 2 改善を期待する点

能力差の大きい日本語能力中級以上の留学生に対しては、それぞれのニーズに応じたプログラムの提供が望まれ、習熟度別講座等のために教室および指導者の確保が望まれる。

#### 3 疑問点

特になし

### III 学生支援

#### 1 評価できる点

留学生が生活面、学習面、あるいは異文化適応面で困難に出会った時、その解決のための指導・助言を受けられる体制が整備されている。また、グローバル化する国際社会で活躍できる人材育成のため、日本人学生の海外留学も積極的に推進している。

#### 2 改善を期待する点

福井大学留学生250人の約60%は中国人であるが、中国人留学生148人のうち131人（88.5%）が私費留学であることなどを考慮すれば、更なる資金援助が望まれる。

### 3 疑問点

特になし

## IV 研究

### 1 評価できる点

特になし

※本センターの研究紀要が発刊されてまだ2年であり、掲載論文もまだ少なく、本センターに関する研究分野は今後に期待したい。

### 2 改善を期待する点

特になし

### 3 疑問点

特になし

## V 社会貢献

### 1 評価できる点

外国人留学生を小・中・高校および地域の団体に講師として派遣したり、地方経済界等の要望に応じて通訳や語学講師として派遣したりするなど地域社会に貢献している。

### 2 改善を期待する点

地域交流活動の情報提供について（様式B参照）

### 3 疑問点

特になし

## VI その他

### 1 評価できる点

福井大学留学生センターのホームページは充実しており、留学生が教育・支援・交流等さまざまな分野の情報を容易に入手できるように工夫されている。

### 2 改善を期待する点

日本語と英語によるホームページであるが、世界中から留学生を集めている状況を考えると、他言語、特に中国語によるホームページも必要であると思われる。

### 3 疑問点

特になし

## V 第2回外部評価委員会記録

### 1. 第I部 専門分野に関する評価

(今尾) 本日は、学期末の大変お忙しいときにお集まりいただき、ありがとうございます。それでは、ただ今より、福井大学留学生センター、第2回外部評価委員会を開催いたします。

最初に、本学留学生センター長の中川副学長より、ごあいさつ申し上げます。よろしくをお願いいたします。

(中川) 本日はお忙しいところをありがとうございます。前回、本学の状況を見ていただいて、それに基づいて評価を進めていただいております。改善すべき点等も指摘していただいております。今日はそれらにお答えしながら、また議論をしていただきます。結果はぜひ留学生センターの今後の戦略や戦術に生かして、大学の運営方針にも反映させていきたいと思っております。本日はどうか、よろしくをお願いいたします。

(今尾) それでは、外部評価委員の報告および評価に移りたいと思っております。第1部では、四つの分野ごとに、各委員の先生方に、専門分野のご報告をお願いいたします。本日の外部評価委員会の司会と議事進行は委員長の若良二先生をお願いしてまいります。よろしくをお願いいたします。

(若) まず、各委員の評価等を読みましたが、多少ニュアンスの違いはあってもほとんど指摘されている点は、同じで、複数の委員から指摘がなされている点もありました。このような点については、福井大学の先生方も「ああ、なるほど」と思われたのではないのでしょうか。

今回の外部評価に際して、まず、一番気になったのは、留学生センターの役割が留学生や日本人学生の教育研究などの学内活動に重きが置かれている点です。このため、大学全体の国際交流活動の中に留学生センターがどのように位置付けられ、どのような役割を果たしているのかという点が明確になっていないと感じられたからです。

恐らく、昨年設置された国際交流推進機構は、このような点を明確にする事も一つの目的と思われませんが、国際交流推進機構という全学的な組織の中に留学生センターを組み込むことにより、従来の留学生センター単独の場合と果たすべき役割がどのように違うのかという点をまずお聞きしたいと思います。

これは、2006年の自己評価結果によれば、様々なGPは採択されていますが、残念ながら国際的なものが挙がっていないからです。すなわち、これは、国際的な活動に関する全学的な取り組みが十分にはなされていないからではないのでしょうか。大学としての国際戦略の構築や文部科学省が進めている大学教育の国際化推進プログラム等への申請に中心的な役割を果たす組織が明確になっていないような気がします。

一方、留学生センターの在り方という面では福井大学に学ばなければならない部分も多くあります。例えば「こころねっと」の発行、同窓会組織、センター教員による教育活動などです。これらの活動に関しては、恐らく他の委員の先生方も、非常によくやっておられることに改めて驚かれたというのが実感ではないでしょうか。

特に、帰国留学生間の国際的なネットワークづくりや同窓会の設立は、多くの大学ではできていないものですので、個人的にもそのノウハウを教えて頂きたいと思っています。

ただ、この点に関しては、副センター長が中心であり、恐らく全てのノウハウをお持ちではないかと思えます。まだ留学生センターとしての取組ではなく、個人的な活動の域を脱していないのではないかと感じました。

(中島) 今の件ですね。まず、第1点は、最後におっしゃった点ですけれども、文部科学省等のいろいろな評価でも、個人ではなくて大学として取り組んでいない限り、評価の対象にならないというのが大原則ですね。そういう意味で、センターとして国際戦略を練るとか、そういう体制は、今のところ、正直な話、あまりできていないかと思えます。第2点、大学の国際戦略にセンターがどういう役割を果たしているかという点に関しまして、今の状況は、センターとしてというものではなく、むしろ国際交流推進機構等いろいろな委員会の委員として、大学としてどう取り組むべきかという議論をするときに、留学生センターの視点から議論に加わるという状況です。例えば、あるプログラムに申請するときに、同窓会というものが福井大学の特色と考えるので、その視点から申請したらいいのではないかなどと。具体的には、国際総合工学特別コースというのがありまして、これは6年間、毎年6人の国費奨学金枠があったのですが、それがいったんご破算になって、全国の大学が仕切りなおして再度申請をしたのですが、本学プログラムも採択されました。センターからの委員の提案で、同窓会との連携を前面に出した内容にして、福井大学の特色を出して申請したのがよかったと認識しています。このように、大学全体の議論の中で、センターの意見を言っているというのが今の状況です。

ですから、今のところ、いわゆる全学的な申請をセンターが主導してやることは、ほとんどありません。そういう全学的な申請において、私自身はいろいろな申請に関わっていますが、それはあくまでも留学生にかかわっている一人であるということをやっています。

(若) その点は、よく理解しています。しかしながら、やはり留学生の教育や学生の派遣に非常に特化した活動をしておられるという印象があり、留学生センターの活動の全学への発信が十分になされていないように思います。そのため、全学的な組織である国際交流推進機構を立ち上げられたと理解しています。福井大学の国際化推進に、留学生との関わりの深い留学生センターがもう少し戦略的に関与する事が出来るような組織となることも大切ではないでしょうか。

例えば、現在、留学生センター長を理事が兼任されていますが、具体的な活動は、恐らく副センター長を中心としてなされているのではないのでしょうか。そうであれば、そ

それぞれの役割がきちんと果たされ、留学生センターへの全学的な支援体制と協力体制が構築されているでしょうか。国際的な活動を全学で行うとき、中心となって検討、実施する組織が果たしてあるのでしょうか、これが、次の質問です。

(中川) 国際交流推進機構を立ち上げた目的は、留学生の派遣や留学生の受け入れも含めて、教育面や研究面での交流、それから、産業界とか公共団体等との連携を図り、国際交流を全面的に推進することです。構想の中では、留学生センター等も全部内包したような新たなセンター組織、あるいは本部のような組織というものを作っていくという考え方もあったのですが、現在、留学生センター等は、その役割や機能を、割にうまく果たしていますので、機構という形態にしました。そのほか機構に関係している組織としては、研究面での連携活動や産業界との連携活動を進めている産学官連携本部がありますが、これはかなり大きな組織であり、独自の役割を果たしています。更に、各学部はそれぞれの考え方を持っていますので、それらを完全に融合させた組織を最初から立ち上げるというのは、ちょっと無理があり、むしろネガティブな面が出てくるであろうと考え、機構という形で、各センターはお互いに連絡を取りながら国際交流に関するいろいろなことをやっていくということになりました。

研究連携ということ考えた場合でも、留学生の果たしている役割はそれなりに大きいわけですね。われわれのところの卒業生が、故国へ帰国して、故国の大学とか研究機関で研究に従事している人も結構います。そういう人を軸にして研究交流を進めていこうと思っています。また、産業界に就職しているとか、あるいは産業を興している人とかもいますので、留学生同窓会組織も利用して、産業連携、産・学の連携というものも進めていける可能性があるのではないかと考えています。

そういう意味で、各センターや部門がうまく連携してやっていこうということで、機構という形をまず作ったのですけれども、ただ、今、全く問題がないかと言いますと、実は、僕の感じだけでも分かりませんが、むしろ問題が発生しているという感じがあります(笑)。推進機構のような国際交流という観点から物事を進めているところと、留学生センターがやっていることが、ぴったりといていないような感じがあります。何か役割分担のような感じになってきてしまっていて、切り分けにくいところも、これは国際交流だよ、これは留学生だというふうな分け方がされてきているような感じがあります。その点は反省点だと思っています。

ただ、将来的には、国際交流という形で一本化していくものだろうと思っています。その中に、留学生の問題というのが中に入ってくるのだと思っています。今のところは、その辺のところは、今、出発して1年目ですので、まだしっかりと連携ができている状況にはなっていないということです。多分、その辺のところを、評価委員の先生方からいろいろと指摘されているのだろうと思っています。

いろいろなことをやっていこうとすると、国の支援とか、そういうものも必要になってきます。そうすると、それなりのビジョン、実績というものが必要になってきます。それを出していくためには、留学生センターだけでは無理だということがあります。もっと広いところでやろうというふうな、一応目標を立ててやっているのですけれども、

まだ十分に機能していないというのが現状だろうと思っています。

(若) 分かりました。最近の傾向として、組織的に外資の獲得を図るとき、提案する取組が全学的なものとなっていることが要求されます。外資獲得のための企画案の作成や公募への申請を全学的な観点から行う組織はどこなのか、留学生センターではやや弱いような気がします。それでは、国際交流推進機構かと思うと、その中にはまた地域共同研究センターなどのミッションが異なる組織も入っていますので、それぞれの組織が独立に活動し、十分な連携体制が取れない可能性もあります。それでは、国際交流委員会のような常置委員会かという、勿論、それらの組織には、このような機能はありません。福井大学として外資の獲得や全学的に取り組む国際交流活動などの実施組織はどこになるのでしょうか。

(中島) そういう、いわゆる外部資金を取るための戦略とか、それを集中的に議論する場所、そこが実は今、欠けているかなと思います。国際交流委員会の方でそういう議論もするのですが、推進機構の場合は、今はどちらかという立ち上がったばかりで、現時点は海外拠点はどうしようかという、その辺ばかりで、あまり全体的な戦略というものは議論されていないので、その辺をしなければいけないという気がしています。

(若) それが、一番気になったところです。

(中島) はい。ありがとうございます。

(若) 次に海外拠点の件ですが、実際に設置してもなかなか動きにくい上に、経費も掛かります。この点、福井大学は、留学生のネットワークができていますので、帰国留学生が多くいる所に設置し、帰国留学生に業務を任せようという発想だろうと思うのですが、実際、どのような業務内容を具体的に考え、どのような目標とミッションをお考えでしょうか。実は鳥取大学も4箇所に海外拠点を設置していますが、それらの拠点には、戦略本部強化事業としての資金を充当していますが、資金がある間に、設置機関との拠点活用に関するノウハウを積み重ねる必要があると考えています。拠点設置に関しては、こちら側のみならず、相手側にもメリットがある必要があります。昨年12月にこの問題に関する国際シンポジウムを開催したのですが、拠点を維持しつつ、実績を残して行くことは難しいことを実感いたしました。

既に、規模の大きい大学の多くは、例えば、中国であれば、北京とか上海に拠点を設置しています。福井大学や鳥取大学のような中規模の地方大学が同じ場所に拠点を設置しても太刀打ちできないのが現状ではないでしょうか。拠点の設置と活用についてはどのようにお考えでしょうか。

(中川) 現在、拠点はまだ1カ所しかなくて、中国の杭州、浙江理工大学の中に研究室を一つ借りまして、そこに福井大学の拠点を置いています。もちろん、ここの留学生が向こう

に戻って、そこの先生になっているというのが基盤になっているのですが、杭州市というのは、実は福井県福井市と姉妹都市になっていまして、これはいわゆる繊維工業関係で大学とも割合に密接な関係があります。福井県の繊維工業も向こうに工場を持っているという状況もありまして、例えばわれわれの大学の卒業生が、先方の、杭州にある繊維関係の企業に就職するとか、ないしは、その繊維関係の企業と浙江理工大学との関係というものでネットワークを作っていこうということを考えているのですが、実はこれは推進機構の方でやっていることで、留学生センターが直接関係しているわけではないのです。

(中島) 私が一応推進機構のメンバーですので申しますと、第1点は、先ほどおっしゃったように、大手の大学ではないので、まず維持管理が難しいということで、基本的な考え方として、学术交流協定校に協力していただいて、おんぶにだっこで、協定校から場所を提供してもらおうという訳です。浙江理工大学というのは、センター長が今申しましたように、繊維に強い大学なのですが、そこの一室に福井大学事務所みたいな看板を掛けまして、場所を確保してもらいました。そこに福井大学の機材とかを置いて、本学の帰国留学生で同大学の准教授をしている方が事務を代行してくれることになっています。

第2点は、維持としては、今、そういう規定を作っている最中なのですが、とにかく福井大学と向こうで、共同で維持・管理すると。何をやるかと言いますと、こちらから共同研究等に出掛けていった人たちのフォローとか。もう一つは、福井大学は産学共同研究などがすごく盛んなのですけれども、今後はさらに国際的な産学共同研究を進めていく上で、そこをベースにして、産学を対象としたシンポジウムをやったりということ今考えているところです。

(若) また、そのための費用が要り事になりますね。

(中島) それは特別の予算を計上するのではなく、個別のプロジェクト予算でやることになっています。

(中川) 国際交流の基本的な予算というのは、実は福井大学の50周年記念のときに作った基金が基になっておりまして、それを今、取り崩しているという状況なのです。いずれはなくなる(笑)。

(若) 290万円ぐらいの資金ですね。事務補佐員を増やし、非常勤講師に予算を付けることで留学生センターの事業費は増えており、現在は数年前の倍ぐらいになっています。ですから、このような予算をどのような経緯で獲得していくのか。また、海外拠点を設置すると費用が掛かります。基本的に国際交流はとにかく費用が掛かるばかりです。このような費用を大学からきちんと配分されるような仕組みを確立し、資料を用意して説明・交渉しないといけないだろうと思います。さらに、外資を取ることも考えていかないといけないと思います。

(中島) 先生は今、自己点検・評価報告書の10ページをご覧になっていますか。これと先ほどの300万円は全く別のものです。

(若) 基金があって、それを取り崩して充てるということですね。

ただ、ここの中にも、例えば留学生同窓会支部の会議費や旅費が入っています。ということは、各支部での同窓会の開催や世界留学生同窓会総会の開催を計画する場合は、別途、予算措置するということですか。

(中島) はい、そうです。今は、国際交流支援費というのが年300万円ございまして、それは寄付金からの果実を取り崩して当てているのですが、同窓会関係経費は、その支援費とセンター予算を合わせてまかなっております。

(若) そうですね。とにかく、国際交流にはお金が掛かります。実は鳥取大学でも1億円ほどの国際交流基金を持っていたのですが、現在、原資を取り崩して国際交流活動費に充当しています。そこで、寄付金のほか、退職する先生方に寄付をお願いするなどして、なるべく基金の目減りを防ごうと努力をしています。国際交流活動の活性化により、学生の動きや外国からの訪問者が増えれば、多くの費用も必要になってきます。

さらに、国際交流活動の活性化のためには、外資を取ることも大事です。しかし、最近では、事業の継続性を求められますので、支援期間が終了した後は、自前で継続して事業を実施しなければなりません。このような状況に対応するためには、常に資金についての明確な方針が必要であり、年度によってやり方が変わることは良くないのではないかと思います。予算については毎年、事前折衝はあるのですか。

(中川) 折衝というよりは、各部局の運営費については、結局、運営費交付金の積み上げの段階で、どれぐらい必要かということで挙げていくだけで、新しい要望を出していない限りは、今の運営交付金配分のやり方からして、前年度に対して1%減という組み込まれ方をします。何か新しいものを出していけば、それについてはまた出てきます。

(若) このような現状に対応できる留学生センターとしての方向性があれば良いと思います。次に、社会貢献活動についてですが、例えば、留学生センター主催の公開講座の開催など、留学生センター独自で企画・実施している事業はありますか。

(中島) そういうセンター独自の事業としては、留学生国際シンポジウムを3回やったぐらいですかね。それは文部科学省とかJASSO等から助成をもらってやったのですが、それ以外には、定期的に一般市民のために、例えば国際理解のための公開講座をやったりとか、そういうことは今のところないですね。

(若) 恐らく福井大学も鳥取大学も地方大学ですから、どうしても地域住民や行政機関、地域のボランティア団体などとの関係がすごく近いと思います。地域社会の期待に応える

ための活動も良くやっておられますが、どちらかという地域社会からの要請を受けて動いておられるのではないかという印象を受けたのですが・・・

(中島) 特に、例えばこちらが、いろいろな活動を通して得られた経験とか知識というものを、直接地域の人に還元するという活動がちょっと足りない気がします。

(若) ぜひそれを充実させてください。鳥取大学では、去年から国際交流センター主催で二つの公開講座を開いています。

(中島) どういうテーマですか。

(若) 例えば、誰でも気楽に国際交流に参加できるように「“にほんご”で国際交流」と言うようなテーマです。これには国際交流センター教員全員が関わっています。その他、留学生にも協力を求めます。このような活動も積極的に実施しないと、なかなか地域社会と良い関係を構築する方向に向かないのではないかと思います。

(若) 次に、教育と研究ということで、三浦先生お願いいたします。

(三浦) 分かりました。

では、「自己点検・評価報告書」に基づいて、述べさせていただきます。全体的な印象といいますと、平成15年の留学生センター省令化を機に、日本語プログラムのクラスと内容が大幅に拡充した、そして学期ごとに改良が加えられている様子がよく分かって、18年には充実した構成と内容の日本語プログラムが展開されていることが分かりました。

それで、金沢大学もそうなのですけれども、いろいろ人的資源、特に予算の問題とか、非常勤講師料の削減ということが非常に大きなプレッシャーになっています。福井大学はまだ発足したばかりで、あまり削減を求められていないのかもしれませんが、それほどたくさんのお金が使われている様子でもないし、平成18年度には、10ページのところに、非常勤講師料が少し減っていますよね。ですから、やはりそういう削減の方向もあるのかなと。ちょっと分かりませんが、そういう経済的なこともかなり苦しい、それから教室も問題もあると思いました。クラスの人数に合わせたような教室がなかったり、数も足りないとか。それから、ちょうどいい非常勤講師の方をいろいろ見つけるというのも、なかなか難しいところがありますけれども、そういう様々な制限を抱えながら、非常によく工夫されて、教育の成果を上げていらっしゃると思います。

それから、全学向けの共通教育の日本語・日本事情プログラムも、クラス編成とか内容などにおいて、とても優れたものだと思います。

それで以下は、コースごとに見てみたいのですが、日本語研修コースと日本語研修特別コース、これはどこの大学にもあるコースなのですけれども、これが「コース終了時の達成度が、ある程度一定の水準を保てるようになってきた」というのは、やはりコースの運営を努力して、そのようにやってきたという証拠だと思います。それは大変良い

ことだと思えます。

それから、研究留学生の数が非常に少ないという問題があります。金沢大学では、年々少なくなってきた、そのところをどうやろうかと、いろいろ工夫しているのですが、福井大学の、前期の受け入れをやめて、後期だけに絞ったというのは、そういうことができるのかというような、私たちが思いつかなかったようなやり方です。一つの例として他大学の参考にもなるかもしれないと思えました。

ほかの大学では、研修コースの人数が減っていくことに対して、たとえば、富山も、金沢も、学内公募をかけて大学推薦の留学生を入れる。それから金沢大学では、大学推薦でなくても、私費留学の研究留学生を入れている。あるいはお金を払って来てくれるような、県庁から送られてくる社会人、50歳以上の方も受け入れるとか、そういういろいろな工夫をして、人数を増やすということをやっているのですが、開講期間を半分にするという手もあったのだなと思えて。一つのスタイルとして、ある程度の人数をちゃんと保ったクラスができるということは、良い工夫だなと思えました。

そして、その特別コースとして、研修コース生以外のコース生が入るということは、いろいろなバラエティーという点で、やはり多様な学生の存在というのは、いろいろな点でメリットがあると思えます。

それから、「かな教材」を開発されたということは、とても良いことだと思えます。ゼロ初級でやってきて、たった半年の日本語をやって、あとは専門に入らなければいけないという学生にとっては、早めに仮名を習得して来日するということは、経済的、時間的に非常に有利だと思えました。

改善を期待する点としましては、日本語研修コースでは、修了成績とその評価基準というものがここには書いてありませんでしたので、分かりにくいのですが、それはあるのですよね。もちろんあるのですが、書いていないということですね。

次は短期プログラム（UFSEP）です。評価できる点としては、受け入れ学生がどんどん増加している、そして中国・韓国以外の学生も増えている、これは良いことだと思えます。修了生の3分の1以上が大学院へ戻って来ているということは、結局はUFSEPで、福井大学についての良い導入といえますか、そういうものがなされたので、学生が戻って来るといった結果になっていると思えます。

それから、この短期プログラムは、成績が出ていますが、良好な出席率と成績によって、教育の成果が上がっていることが示されています。いろいろな、「受講者の日本語能力、要望、受講状況を考慮して日本語科目の整理統合と増設を繰り返し、実情に即したカリキュラム編成を行ってきた」と26ページに書いてありますが、そういうことによって成績も良くなっているなと思えました。

それから、受講者が少ない中級レベルというのは、全学向けのコースとの合同授業体制をとって調整するという工夫がなされていますけれども、それも大変重要なことだと思えます。

改善が期待される点としましては、受講者が1～2名しかいない、「はじめての作文」というような、初級の方のものがあるのですが、それも何か、日本語研修コースと合同で行うとか、そういう工夫をすることによって、どうにかできるのではないかと。

非常勤講師のコマ数の削減への対応ということも考えると、そういう合同で行うクラスも考えたらいいかなと思いました。

そして、補講を無料で行ったということが書かれているのですけれども、これは非常に熱心で、熱心さが示されるという点ではいいと思いますが、私は反対に、無報酬によって支えられる体制を作ってはいけません。そういう無報酬で行うようなことをするのでしたら、無報酬でやってくださるような、例えば定年退職なさった方にボランティアで来てもらうとか、そういう形でした方がいいかなと思いました。現在やっていらっしゃる非常勤講師の方が、その補講を無報酬でやるというのは、それはたまたまそうだったと思うのですけれども、たまたまそういうことというのは、1回、そのとき限りにして、あまり続けてはいけないのではないかなと思いました。

次に日韓共同理工系プログラム、これは誰も希望者がいない、でも開設していますと。これについては、ほかのどの方のコメントにも書いてあったのですけれども、やはり変ですから、どうにかしなければならぬのではないのでしょうか。私は、これは留学生センターの責任ではないと思うのです。大学の知名度とか、韓国人の学生はみんな東大に行きたいというのがありますので、金沢大学にも例年一人ぐらいしか来ないのですけれども、それで金沢が工夫していることというのは、韓国にリクルートに行って、発信するというのを盛んにやっています。それで、例えば3名とか1名とか、そういう人数を獲得してきています。そういうことをするならば、しないならしないという方針をきちんと立てられた方がいいかなと思いました。開設していても誰も来なかったら、労力を使わなくていいから、いいのかなとも思いましたけれども。

次は全学向けの日本語コース。これは初級、中級などの名称にとらわれず、受講者の日本語レベルに応じた教科書を選定して、教授方法をとっていると書いてあります。そして、そこできめ細かい指導を行おうとしているということが分かります。それで、留学生の5人に1人がこのコースを受講しています。そして、各クラスの最終試験合格者は、初級、中級で5割程度、これを考えますと、いいような悪いようなのですけれども、単位認定もなくて、必須でもないというクラスとしては、まあ悪くはないかなと思います。

それから、分かりやすい情報が提供されていると思いました。プレースメントテストの時期とか、クラスのこととかに対して、きちんと情報が発信されています。それで、多くの大学が採用している15週間ではなく、13週間の学期にするということですが、これも、いいような悪いようなことだなと私は思いました。つまり、遅れてくる学生に対応するために、4月の初めから始めてしまったら、後で遅れてくる人が必ずいるから、ということなのですが、これについても後で伺いたいなど。これは13週でいいのか、ちゃんと成果が上がっているのかどうか。これで15週と同じように成果が上げられるということでしたら構わないし、夏休みとか、休みのときに補講が行われているようですが、そういうことでちゃんと補強できるということならいいかもしれませんが、やはり13週といえますと、学生は13週分しか勉強しないかなと思いました。

一つ、私が問題だなど思いましたのは、4段階のレベルしかないことです。これはお金の問題と非常に関係があると思います。それはよく分かるのですけれども、たった四

つのレベルではちょっと荒っぽいといいますか、一つ一つの学級が寺子屋式みたいになりかねない、レベル差が大き過ぎる。その辺ももう少し、どうにか工夫できないだろうか。多分無理なのだろうなと思いましたがけれども。

松岡キャンパスで行われている日本語授業について言いますと、医学部が非常に離れていて、そこでも授業が行われているが、留学生センターによるものではないということです。前は別の大学だったのが一緒になったという経緯があると思うのですが、日本語の授業はすべて留学生センターが責任をもつということにしなくてもいいのかなと思います。もちろん難しいことではしょうが。

それから、特に気になったのが、専任教員の突発的病気欠勤とか、休職とか、長期にわたる病気とか、いろいろ出てきましたので、これがあまりたくさんあると、ほかの先生方の負担がとて大きい。それからカリキュラム、シラバスとか、いろいろなことの変更をしなければなりませんので、学生も不利益を被ります。こういうことはどうにかして解決できないものだろうかと思いました。

英語補講に関しましては、英語をすることはとても大切だと思います。何か継続的にできるような、全学的に呼び掛けてできるようなことを工夫なさったらいかがかなと思いました。

全学向けの教育、学部・学生向けの教育は非常に充実していて、例えば応用日本語では、職場のマナーや企業文化、日本事情では日本の地理・文化など、それから異文化／多文化コミュニケーションは日本人学生との共学ということを実現しており、大変優れたカリキュラムだと思いました。

また、プレースメントテストを行って、学部学生といたしましても学力が全然違いますので、学生を能力別に二分したというのは、とても良い方法だなと思ひまして、金沢大学もそういうふうにするべきかなと思いました。

改善が期待されるものとしましては、各先生方が、いろいろな専門教育等の科目を担当していらっしゃるのですが、それは一つには良いことだと思います。留学生センターのことだけをしないで、全学的に貢献している、それから各々の専門性を生かすことができる、それはとても大切なことで、やらなければいけないことだと思うのですが、あまり留学生教育に対する負担とならないようにしていただきたいと思います。以上、ちょっと長くなりましたが、コメントです。

それで、ちょっとご意見を伺いたいののが、先ほどの13週の問題と、人数が少ないクラスを合同で行うようなことをしたり。実は金沢大学では、これもいいか悪いか分からないなりに、非常勤講師料の削減ということでやっているのですが、短期プログラムを全く別立てにするのではなく、あるいは短期プログラムの日本語を独立させずに全学向け日本語コースで行ったりすることはできないか、ということです。それによって、学生のバラエティーが、クラスの中でいろいろな人がいるというメリットがあります。逆にいろいろな人がいますから、一つのタイプの学生に特化できないというデメリットがある、というコースをやっているのですが、一応、人数が非常に少ないクラスというのはなくなります。ということがありますが、まず、合同クラスができるかどうかということについて、いかがでしょうか。

(今尾) 技能別クラスの受講者が1～2名であるという、技能別クラスの問題なのですが、当初、この技能別クラスを作った目的といいますのは、1年間の短期プログラムのうち、その半年で規定の10単位を取ることができるようにということと、もう一つは技能の特化といいますか、文型、文法の導入だけではなくて、会話とかといったものという目的で作られたものです。初めは、研修コースとの抱き合わせでやったのです。けれども、研修コースは、文型の導入が週に5日で10コマ、短期プログラムの方は、当初3コマだったのが週4コマになったばかりという感じで、どうしても10コマと4コマではレベル差が出てきます。どちらも日本語ゼロレベルで受け入れる学生ですが、同じゼロでも半年の間でかなり進度が違うということがあります。それで短期プログラムの学生は、例えば前期で来たら後期に、今は後期受け入れだけになりましたので、後期は文型導入だけで、次の年の前期に技能別クラスを受講ということになっております。研修コースとの抱き合わせはレベル差の点で難しいですね。

(三浦) 難しいですね。私も、それはよく分かります。同じ初級でも、たくさんする人と少しする人では一緒にするわけにはいかないというのも分かるのですけれども、どこかで少し、技能別とか、何か特別なクラスがあったら、そののところに出席させて、一緒にして、そののところは少しレベルが違って構わないというようなクラスがあれば、いろいろできるかなと。実は私たちもいろいろ、そういうことを考えているのです。

(今尾) 非常勤講師削減の件ですけれども、技能別クラスは専任の教員が担当しております、科目が増えたことによって専任の負担が一つ増えたということで、基本的には何かあったときに非常勤講師が担当します。例えば、先ほどもちょっとお話が出ましたけれども、専任が突然病気になったときは、それは単独授業ですので、非常勤で1コマお願いするということがあります。連続授業で休まれた場合には、もっと大変ですけれども。取りあえず、これは週1コマの単独ですので、半期休むということになったときには、専任か非常勤講師が担当します。単位認定がありますので謝金講師では駄目で、単位認定が可能な非常勤講師をお願いしています。

無償の補講のことをちょっとお話しします。短期プログラムの学生は10単位の日本語の単位認定が必要なものですから、補講をせざるを得ない状況が時々生じてきます。今まで5年ぐらい見てきたのですけれども、その時によって受け入れる学生の日本語のレベルといいますか、習得状況は非常にばらつきがあります。当初は中国系がほとんどで、集約的な学生が多くて、勉強集約的というか、本当にインテンシブな学生が多かったので、それほど問題がなかったのですけれども、姉妹校提携先が増えて非漢字系の学生が増えてきたことが挙げられます。アラブ系学生など、かな文字の段階で習得困難な場合、単位をどうするかという問題になります。かな習得ができない状態で本人が単位を欲しいという場合、補講が必要になります。実は工学部の先生に単位取得が難しいという相談をしたら、工学部の先生の方では、短期プログラムで日本語科目10単位必要だという認識が無くて、単位互換と間違えていて、母校でその10単位を認めてもらえればオーケー、単位が取得できなければ、それはそれでいいという認識だったみたいです。単位を

取るか取らないかは学生の自由でしょう、みたいなことだったのですけれども。結局、単位はやはり必要で、補講をして単位を出した経緯があります。げたを履かせるのも限度がありますから、最後の最後までかな文字を完全に覚えられない学生が出たことで、短期プログラムでも、事前に「かな教材」の送付を実施するに至ったわけです。

「かな教材」送付については、瀬口先生のレポートにも、経年的に見て何かの形で残していくようにとのサジェスションがありましたけれども、渡日前送付の効果としては、少なくとも学生の側に覚えて来なかった時の罪悪感がある（笑）。渡日後すぐにプレースメントテストが始まって、授業前にはかなの確認をしますので、そのときに、やってこなかった学生に罪悪感が、ここ1～2年出てきました。それで、授業が始まるまでに二日か三日あるから覚えてきてねと言うと、覚えてきます（笑）。実はそれは、以前はなかったのです。この1～2年、全くやってこない学生が一人、二人いましたけれども、授業までには覚えてきます。

(三浦) それで、もうあまり時間もないのですが、無償補講というのは、そのときだけだったのですよね。

(今尾) いえ、その後もありました。昼休みにも、二度行いましたかね。この場合は90分の補講でしたけれども、昼休みに30分ずつの補講をしました。授業についていけないので、その学生だけの個人教授みたいな形でした。2年前にもありましたし。確か記載したと思います。

(三浦) そういうのがあるということが見込まれたら、初めから予算を取ったらどうですか。

(今尾) 非常勤講師枠というのは、もう決まっています。謝金予算で払うということですかね。何らかの形で……。

(若) 予算の特別経費か何かが……。

(三浦) アラブ系の学生とか、どうしてもついていけない人が出ますよね。それには補講が必要だと思うのですけれども、常に無償というのは、私はすごく気になるのですけれども。

(瀬口) その無償の件なのですが、やはり神戸大学でも、ここでいうと研修コースですね、予備教育6カ月の研究留学生や教員研修留学生の中には、どうしてもついていけない学生が出てきます。その時には、大学院生で、日本語教授法を勉強している院生に補講を頼んでいます。自分の勉強の機会にもなりますし。

あと、人数のことなのですが、神戸も法人化後、いわゆる経費カットということで、センターも一部局として5%カットしたのです。専任教員は9名なのですけれども、辞めることはできませんので、開講科目数を半分ぐらいにして、やむなく非常勤の先生の数を減らしました。そして、ここでいうと研修コース、いわゆる大使館推薦の予備教育

と全学対象の総合コース（補講コース）とをかなりの部分で重ねあわせまして、午前中に予備教育（集中）コース（4レベル）を置いています。予備教育は研究留学生在が対象で8時50分から12時10分までで、80%以上出席しないと修了証書を出しません。そして、予備教育（集中）コースでクラス運営上、人数的に余裕がある場合には、交換留学生や一般の研究生をも対象にして、学内募集をしています。学内募集は結構あります。希望する学生の指導教員とはかなり丁寧に連絡を取って、絶対80%以上出席させるということを受け入れ教員に約束してもらいます。もし、それができなければ、辞めていただくようにはっきり申し上げます。そして、午前中は10人程度のクラスで完全にインテンシブ授業を展開しています。一応定員は一クラス10名ですが、多いときは最大で12名まで受けることもあります。

午後からは技能別で選択科目で対応しています。先ほど今尾先生がおっしゃったように、毎日やっている人と、ぼつんぼつんとしている人との学力の差は出ますけれども、一応、技能別は初級と初中級と中級と中上級の4レベルおいています。それ以外はそれぞれ1コマずつなのですが、セミ・インテンシブとして日本語ゼロレベルと初中級コースを毎日おいています。ですから、随分授業を重ね合わせて、うまく工夫をしています。その他、単位の取れる学部生対象の「日本語・日本事情」も前期5コマ、後期5コマあります。

(三浦) 金沢大学もそのように、全学補講のクラスと合同でやっています。補講のクラスの中に1日2コマ、午前中の1限目と2限目を週五日やるクラスと、1限目だけやるクラスというふうにして、普通の方は1限目だけの方に出て、集中コースの方は2限目までで、それに耐えられる人は集中コースに入ってもいいと。その代わり、集中コースの授業には全部出なさい、休みは1回たりとも許しませんという、もちろん病気とか入試とかだったら仕方がないけれども、そういう形にしています。

(膽吹) すみません、時間がないので、先ほどのお答えの、13週間の問題なのですが、前期に関しては、夏休みにずれ込んで2週分することは可能なのですが、本学は工学部、しかも大学院生が全学を受けています。大学院生はご存じのとおり、2月というのは、中川先生がよくご存じですけれども、修論、博論で、もう2週間延ばすと言っても、誰も来やしない。そうすると、前期は15で後期は13というアンバランスが生じます。私どももそれは考えたのですが、学生に聞きましたら、そんなことはもう無理だと。しかも11月の下旬から、全学はががががと減ってきます。それは工学部は実験、レポート、ゼミ発表などときますので、特に本学は工学部の院生が多いということ、先生方にもご承知いただければと思います。

それと、先ほど瀬口先生から、院生を使うとありましたが、私どものところは教育学部でして、日本語教育のプロパーではありませんので、そういう人材がいません。そういうことができないということ。それと、13週にするのには、前期後期のバランスが崩れるということで、13ということをしています。それが回答の1。

続きまして、4段階レベルの問題ですけれども、これは教室とも関係しております、

前回ご覧いただきましたとおり、小教室、つまり5～6人が3教室、それと12名の教室が1教室しかございません。例えば全学のコースと、短プロを合併させたクラスを作ったときに、12名を超えると、要するに机といすを前後に並べてやるといった状態で、まずは教室の確保がなければ落ち着いた授業ができないということで、先ほどからご指摘いただいている合併授業というの、前提としては教室の確保ということがまず挙げられるかと思えます。

中級の授業に関しては、短プロの中級は例年1名です。1名なので、全学に放り込んでいます。これが、短プロが秋入学のみになりまして、短プロだけで中級が5名、例えば2007年は5名になりました。そうすると、もう合併は無理ということで、短プロだけで一つの教室を使います。そうすると、一つの教室、一つのクラス、一つの予算が生じるわけです。それによって予算も生じる。ですから、教室、予算、人材というものがすべてそれによって消えていくわけです。それが悪循環と言われれば悪循環なのですが、それを解決する策としては、センター独自の建物を建てて、そこにおいて30名教室などを確保しない限り、4段階の是正においても、現状では難しいところがあります。

続いて3点目のところは、私はお答えできませんので、ここはセンター長に譲るのですが、教員の欠勤のことについては、私は言うべき資格はございませんので、管理者の方にお任せいたします。ただ、三浦先生がおっしゃってくれたとおり、私が予算とかプログラムを組み直したりしているのですが、本当に、まず学生への連絡、それから学生の学習意欲の低下ということもやはり懸念されることもありますし、そういった心配はあるのですが、詳しくはセンター長に（笑）。

(中川) 病欠欠勤ということで、やむを得ないというふうに判断しているのですが、それが続く場合は、そのままでは置いておけないので、いわゆる休職していただくか何かをして、非常勤講師の手当をするとか、そういうことを考える必要があると思えます。

実は今年度の後期は、そういう手当が間に合わなくて、国際課の方のお金で何とか手当をしたということなのですが、そういうことを長期間続けていくことはできないと思いますので、長期間続くような場合には、はっきりと休職に入ってもらいます。それに対して、それを補完する意味で、正規を採るということに関しまして、休職期間が5年とかいうオーダーで続くのであれば、休職期間だけ正規の人を採ることはできますけれども、普通、1年とかいうのでは採れませんので、非常勤で対応することになります。それに対する予算措置はできております。

ただ、先ほどの補講に対して、無償補講というのがあまり続くのは、多分問題です。もしそういうことがある場合には、年度予算が議論されるちょっと前ぐらいに、来年度にはこのぐらいのところが必要ですよというふうなことを、僕が押さえていないといけないのかもしれませんが。実際にはちょっと押さえきれていないので、これが専任でないセンター長の限界だと思えますけれども、そういうことに対して予算措置はできます。

(三浦) そういう部分にセンター経費、事業費か何かから・・・。

(中川) センターの運営費で。

ただ、何もなしには出せませんので、センターの運営費も、毎年1%ずつ減らすということが決まっていますので、減ってきているのですが、特別なものについては積み上げるとのことになっていますので、そういう必要な経費は積み上げることができると思っています。

(若) 教室の件は、どのあたりまで学内の皆さんに意識されているのでしょうか。大学として何かしようとか、センターとして全学的な協力の下で教室を確保するというような動きはあるのですか。センター独自でビルを建てるなどというのはなかなか無理だと思います (笑)。専用の教室をとというのも、なかなか難しいのが現状ではないでしょうか。

(膽吹) 例えばセンターの授業ですけれども、ご存じのとおり、初級レベルであるとコーラスがあります。そうすると、コーラスをすると、うるさいので出ていってくれというクレームが毎年、共通教育ですら上がってきますので、特に本学の場合は、教育学部などは研究室と教室が廊下1本で向かい合っているのです。ですから、教員研究棟、教室棟ではないのです。この教室の、そこが研究室だったりしますので、普通にやっても、留学生がどっと笑ったりすると、もううるさいので、それでコーラスをすると苦情の雨あられになりますので、結局は今いるところで……。

(若) 例えば、学生会館の一室を借りて使うということは。

(膽吹) そういうことになると、ちょっと私も……。

(中川) それはやろうと思えば可能です。ただ、毎週ということですよ。それができるか。

(石川) 学生会館などは、就職支援などには毎週1部屋確保されていまして、例えば金曜日の午後、就職支援の相談室にするといったふうにやっていますので、話の仕方によっては、学生と協議して、金曜日の1限目は演習室に転用するよ、だからサークルには使ってもらえるなよというやり方は、多少のことでしたら可能だと思います。

(若) 実は、鳥取大学ではそのような部屋をよく使っています。音を出すような授業では、一般の講義室から離れた学生会館の一室とか、普段はあまり使われていないような離れた部屋だとかを、事前に予約して使うようにしています。

何か工夫ないと、縮小傾向は打開できないのではないのでしょうか。何とか全学的な協力を求める方向で行けば、もう少し解決策があるのではないかと思います。極端なことを言えば、学外に出てもいいわけです。

(膽吹) ただ、ご存じのとおり、日本語教育の場合、多くの教材等、絵カードやビデオ教材などを常備するとか、あるいは独自のやり方といいますか、教授法がありますので、それ

に教室が不向き、例えば階段教室だったり、あるいは机が固定されていたりとか、そういったさまざまなことが、結果的に授業運営の障害になってやりにくいということがありまして、結果的にふさわしい、適切だと思われる教室というのはまた限られて、おっしゃるとおり、前向きに広く考えていきたいと思いますが、なかなか。

(三浦) 私なども、コンピューターもプロジェクターも、いろいろなものをいっぱい入れて、旅行カバンのごろごろで引っ張って、離れた教室まで持って行っています。もうそれは仕方がないですね。そういう負担とかもあるのですけれども、やはり教室を確保するために何か、ちょっと不便でも。

(中川) 大学としては、今、施設整備のマスタープランを持ってまして、この中央ゾーン、これまでは主として真ん中の道から向こう側ばかりを整備してきているのですが、来年度からは、その道からこちら側の整備に入ってきます。その中で、教育地域科学部の整備と、それからこの辺は中央ゾーンと言っているのですが、中央ゾーンの整備計画があります。来年度から、図書館から始まりまして、順次こちらへ下りてくる。マスタープランとしてはそうなっています。ただ、ここ1～2年の問題というところでは、何処か教室を探すとか、そういうことで対応しないと、その間は。将来的には、この問題は解決すると考えています。

(三浦) 私、研究のことを言うのを忘れていたのですが、すみません。評価できる点というのは、いろいろCALL教材を開発し、Web上に公開するという事とか、文部科学省の特別配分で留学生国際シンポジウムを行うなど、留学生センターとしての行事を行っている。それから、教員の専門分野がいろいろ多様で、それぞれの専門分野の研究を発表しているという点は評価できると思います。

改善を期待する点としては、総体として、日本語教育に関する論文が少ないと思います。センターとしての、共同で取り組む研究とか教材作成とか、そういうものが共同でセンターとしてなされるとよいのではないのでしょうか。もちろん各自の専門分野の研究というのは大切なことですから、それを続けて、そのほかに共同のものということです。それから、外部の査読付きの学術雑誌に採用される論文数をぜひ増やすようお願いします。

それから疑問点として、研究業績がない教員がいらっしゃるということは、おかしいことですので、何か、論文を何本書かなければならないということはないのですよね。

(中川) センターに対しては、そういうことはないです。研究センター以外は。

(三浦) 無理やりそういうものを義務付けるというのもあれですけども、何か工夫ができないかなと思いました。

(若) センター長もご存じのように、今はミッション別という事で、センター化が進んでい

ます。大学教員は教育、研究、社会貢献のすべてに関与するという従来の考え方は変わりつつあります。センターに与えられたミッションをきちっとやることが第一に求められます。そうであれば、留学生への教育を主要なミッションとする留学生センターでは、研究をどのように位置付けるかということが重要であり、各大学が置かれた実情の中でそれぞれのセンターが考える必要があります。結局、それはセンター人事と深く関わってきます。例えば、昇任や採用などの人事に研究業績をどのように評価していくのかということにつながってきます。特に、若い教員にとっては重要な問題であり、研究業績がなければ昇任できないようなシステムにするのか、斬新な授業や社会貢献などの実践を評価し、昇任できるような仕組みにするのか、この点が、組織の大きな特徴になるのではないのでしょうか。ただ、各大学の各センターが果たすミッションはそれぞれ異なる事もありますので、他大学への転任や他大学からの転入を考える場合は別の観点で議論する必要があります。結局、留学生センターが大学の中で担うべき役割を全学的なコンセンサスの下で明確にしておくことが重要であり、各学部の内部事情により留学生センターへの認識が異なる事は、センターの学内的立場を非常に弱くするのではないかと思います。

(中川) 疑問点の中に、センターの教員人事をどうするかということも書かれていたのですが、考えてみると、その辺がちゃんと整理されていない、現在整理されていないということです。

(若) しかし、研究を重視しすぎれば、研究業績は上がっていくものの、例えば、留学生への授業や相談などの本来のミッションが十分に果たせないということにもなりかねません。やはりセンターは学生定員を持たないという事で、ある意味、根無し草です。従って、何を以て評価するのかという点を明確にしておかないと、非常に不安な組織になってしまいます。この点に関しては、大学として明確にしておかないと、当然、先生が言われるような意見が出てくるのではないかと思います。

(中島) 今年から教員の個人評価が始まりまして、大学全体の管理、それから教育、研究、社会貢献、この四つで25点、25点、25点、25点で評価することになっています。教員の自己評価をセンター長に報告して、センター長がそれを確認評価して、私たちに戻すというシステムはできたのですけれども、ではそれが昇任にどうつながるかという点はまだです。

(中川) 一応、それぞれの細かい項目を設けてありまして、それに点数が割り振ってあって、それに従って評価することになっています。

(若) 大学の業績評価には、研究業績は必ずありますが、併せて、教育内容の評価も必要ではないのでしょうか。授業に役立つような研究業績を上げて授業をするのと、そうでない場合では、もちろん学生に対する指導力も違いますし、昇任等の人事問題にも関わって

きます。この点については、鳥取大学もずいぶん検討していますが、なかなか難しいようです。

(中島) 金沢大学では何か論文に関する義務規定というようなものがあるのですか。

(三浦) センターの教員が書かなければならないというのはいりません。別にルールはないのですが、やはり書かなければならないという雰囲気はあります。

(中川) いずれにしても、具体的なものがないと評価もできないということで、学部の方では、研究業績は具体的にはっきりしているのでもあまり問題がないのですが、教育の方ですよね。教育の方は、授業をやっているからといって、それが何か具体的な結果として残っていないということがありまして、そのためにいろいろなことをやっています。学生によるアンケートであるとか、授業の達成度を成績または成績分布で評価するとか、そういう具体的なデータを出して、個人の先生が教育をどう実践したかということが分かるような形のデータを持つようにはなっています。

多分センターでも、やはり教育・研究、それからセンター特有の活動、そういうものがいろいろされているのですが、形のある結果になって表れるような、そういう工夫をしていかないと、確かに宙ぶらりんになってしまうという気がします。

(若) 地域共同研究センターなどでも、恐らく教育や研究に携わらない方もおられるはずで。学外で共同研究のコーディネートしてくるミッションですが、肩書きは、准教授、教授の場合もあり、教員という側面もあります。このような方もプロモートしていくわけですが、研究業績や教育業績が特にあるわけではありません。このような場合の昇任人事は、研究や教育では評価できませんので、共同研究のコーディネート実績として評価するしかありません。

(中川) その場合は、営業記録のようなものを業績として上げてきますよね。

(若) 結局、センターは与えられたミッションを着実に果たしていくのが業務ですが、学生定員を持たないため、学内での認識と存在基盤が弱くなりがちです。大学でセンターの在り方についてよく考えて行かないと、センター所属の教員が自分の将来について不安になります。

(三浦) 定員のことで、私はよく分かっていないのですが、研修コースとか短プロとかは、センターに所属していないのですか。

(今尾) センターには属していません。センターに所属する学生というのはいりませんので、先ほどもいろいろな推進機構のお話のところ、センターがどのように関わっていくのかとか、例えば交流協定などを結ぶのに積極的に関わっているかどうかというお話がありま

したけれども、基本的に学生はすべて学部所属です。

(瀬口) 予備の研究留学生もですか。

(三浦) 研修コースも？ 予備教育なの？

(今尾) 予備教育ですけれども、例えば教員研修生は教育学部所属です。入学前予備教育でも、一応所属としてはそうです。

ですから、担当教員といますか、教育学部の先生がそれぞれの研修生に一人ずつ付きますし、短期プログラムも、日本語のプログラムはセンターでやりますけれども、もちろんほかの専門もありまして、基本的には工学部所属です。もちろん、全学の大学院生とか交換なども全部そうです。そういう意味で、根無し草とおっしゃるのはよく分かります。

(中川) 入学前教育も、学生の身分は研究生ですか。

(林) いえ、違います。予備教育の半年間は、例えば教員研修留学生ですと、指導教員というのは、教育学研究科の方にいらっしゃいますけれども、半年間は留学生センター所属の学生です。

(中川) 留学生センターに所属しているのですか。

(今尾) そうですか、すみません。

(林) それが終わりましたら、研究室の方に。

(膽吹) 研修だけです。

(今尾) 研修だけですね。では後期受け入れの4名とか5名だけが。

(石川) 予備教育の学生だけです。

(三浦) 予備教育学生がセンター所属ですね。

(石川) その期間だけが。

(今尾) 6カ月だけです。

(膽吹) それ以外の日研生とか、すべて学部所属ですし、例えば院生の研究留学生とかも研究

科所属です。

(若) いわゆる予備教育（集中研修コース）の学生のみがセンター所属です。

(今尾) ですから、後期の5人受け入れとか、そのレベルですね。そういう意味では。

(中川) その予備教育の学生も、現実には学部のどなたかの先生の指導の下に入ってしまったているんじゃないですか。

(今尾) かなりつながっていますので、実質は・・・。

(膽吹) 現実問題は、教育研究科の。

(今尾) 籍はセンターですね。半年間はセンターに。だから、250名いると言われている留学生の、センター所属は、後期のときの4名とか5名ということになりますね。早く言えば。

(三浦) 金沢では、短プロも日研生も、予備教育ももちろん、あるいはその半年間、短プロも日研生もセンター所属ということにしていますので、センターの学生というのが50人ぐらいいます。

(中川) センターに、その学生がいるのですか。

(三浦) はい。いわゆる学部の定員とはまた違いますけれども、短期プログラムと日研プログラムは20人ぐらいずついますので、今年は30人ぐらいかな。ですから、50何人ぐらい、必ずセンター所属という人たちがいます。

(中川) 普段はその学生はどこにいるのですか。センターですか。

(三浦) センターにいるというか、センターがもっている教室はないのですが、普通、日本語を勉強したり、日本事情とか、そういういろいろなことをしますので、教室に来ます。寮が近いので、しょっちゅうそこから来ますから、特にラウンジみたいなものがなくてもいいのです。

(若) 基本的に日本人の学部学生と同じ扱いです。

(三浦) そうですね、学部生のような。ですから、学部生の動く範囲をうろうろしています。

(若) いわゆる研究室というものがありませんので、自分の机と椅子がありません。

(三浦) でも、学部生もみんな同じですから、学部生がいるような、ちょっとした座る場所とかがありますよね。そういうところにもいます。

(若) ただ、福井大学は鳥取大学と学部構成や学生定員がよく似ており、工学部が大きくて学生定員の半分くらいが工学部です。工学部には独特の文化があり、学生の面倒見は結構いいので、留学生に対しても「うちの研究室に来てもいいよ」ということを言って頂ける教員も多くいます。その結果、いつの間にかその研究室に入り、席ももらって、4年生や院生と一緒に研究をやっている事もあります。自分の授業があるときは研究室から授業に行くことになります。地域学部は研究室が狭いので、工学部のようにはなりにくいのですが、それでも教員の隣の部屋に椅子と机をもらっている学生もいるようです。

(中川) もう一つ問題になっているのは、日韓共同理工系留学生プログラムで、われわれのところには、これまで一人も来ていません。多分これはシステムの問題だと思っています。韓国の方で学生募集をして、セレクトするのでしょうかけれども、それで日本語教育をして、そしてこちらに送り込んでくるというシステムでやっている限りは、中央の大学へ全部行ってしまうだろうということは、むしろ当然かなと思います。韓国からの留学生を拡大するという事は、これとは別に考えた方がいいかなと思っています。

ただ、今のところは、これには予算が付いているので、その予算分を、国際課としては、いろいろなところに使えるというメリットを活かしています。

(石川) 毎年、来るかもしれないということで予算を計上しているのですけれども、結果的には今、1回もありませんので、もう来年からやめようかなと(笑)。最後までずっと確保しているのが無駄なような気がしまして。

(中川) ある意味では、有効利用はされている。

(若) 時間になりましたので、最後に学生支援についてお願いいたします。

(瀬口) はい。では学生支援につきまして、簡単に発表させていただきます。私が参考にさせていただいたのは、前回お邪魔したときに伺ったことと、「自己点検・評価報告書」と、それから「留学交流」に、中島先生がお書きになったことを参考にさせていただきました。

学生支援というのは、センターができる前から随分なさっておられたということもありますし、まさにネットワーク型で相談指導、学生支援をなさっているということが素晴らしいと思います。産・官・学・民というので、私も拝見して、ずいぶん学ばせていただくことが多かったと思います。

一つ思いましたのは、ネットワーク型についてなのですが、地域に関しては十分だと思うのですけれども、センター内で、場所が物理的に離れているということがあつたすけれども、私も相談指導ですが、日本語の先生方ともかなりお互いに助け合っ

ていますので、その辺のところはどうしておられるのかなということと、それから、海外とか国内の他の大学とのネットワークというのは、どこにも見えてこないということです。例えば海外ですと、NAFSAとか、ヨーロッパですとEAIEとか。国内ですとJAFSAとか。JAFSAは団体会員なのですか。

(中島) いえ、個人会員だけで、団体は入っていません。

(瀬口) 個人で先生が入っておられるのですか？

(中島) ええ、何人か入っていると思います。

(瀬口) JAFSAとか、国立大学法人ですとCOISANというところがありますけれども、そういうところに入らなくても顔を出して、もう少し福井地域以外のネットワークにも目を向けられてもいいのではないかという気がしました。

また、若先生もおっしゃっていましたが、学生支援についてのネットワークの要というのがかなり、一極集中しているというのが、危機管理上ちょっと気になる場所です。危機管理の鉄則として、一ヶ所に集中しているというのは、何かあった時に対応できないといえますか、特に神戸は、震災の時、中心部である神戸市がやられたものですから、結局そこから情報発信ができなかった、東京への救援要請もできなかった、まさに情報の空白があったわけなのです。そう申し上げても神戸大学も危機管理はなかなかできていませんので、偉そうなことは何も言えないのですけれども、その辺の危機管理体制と、他大学とのネットワークにも少し力を注いでいただいたら、もっと中央部分に情報も行き渡り、福井大学留学生センターとして目立つのではないかと思いました。生意気なことで申し訳ございません。

それから、派遣の方は、書いておられますように、なかなか日本人学生の海外派遣が活発にいかないということで、これは神戸も同じようなことがございます。とにかく福井大学の工学部、教育学部、医学部に1年生で入ってきた時、新入生が夢を膨らまして嬉しいといった気持ちの時に「学内には250人もの留学生がいるのですよ」と。「あなたたちは大学に入って、次はどこに目を向けますか？海外もありますよ！」というように、例えば入学式の時とか、まだ、フレッシュな時に海外にも目を向かせるというのが一つ有効な方法ではないかなと思います。

また、こちらは工学部ですとチュータやTAとか、研究室レベルで対応していらっしゃるのですが、あまり必要がないのかもしれませんが、一般学生が留学生と交流し支援するような学生サークルというものはないのですか。

実は1994年に私がそういうボランティアサークル [Truss] を作ったのですが、それは大きくサポート活動と交流活動からできています。サポート活動のほうは、いわゆる登録ツアーと呼ばれるものが中心で、主に、留学生センター所属の大使館推薦の国費留学生の銀行や郵便局の口座開設手続きのお手伝いや外国人登録や国民健康保険への加入手続きなど学生がマンツウマンでしてくれています。書類を作成することから始まり、

その後、一緒にそれぞれの場所に出かけて手続きをするのですが、すべて手続きが完了するころには、気楽に話せるような雰囲気が出来上がっています。漢字いっぱい細かい書類を共同で埋めていく過程で、たとえば寡黙な学生でも必要なことを片言の英語でも話さざるを得ない状況があります。その内に自然に会話ができて親しくなり、その後、携帯を買うのに付き合ったり、一緒にご飯を食べたりするようになります。

日本人学生は留学生のお手伝いをしているということなのですが、多くを学び育つのは、実は日本人学生なのです。交流を通していろいろ刺激を受けた日本人学生は、今度は自分が海外に留学するわけです。また、留学生も自分もいろいろ手伝ってもらったからと、そのボランティアサークルに入っています。特に日韓共同理工系の学生などもそのグループに入り、日韓の学生が来たら、先輩が全部後輩をサポートしています。留学生のためにバザーをしたり、歓迎パーティをしたり、保健管理センターで行われる留学生の健康診断の時などもサポートしています。こちらも随分いろいろ留学生と活動していらっしやると思いますけれども、日本人学生に与える刺激、教育効果はすごく大きいですね。ぜひフレッシュな学部学生も巻き込んで、刺激を与えていただければいいかなと思います。

その他、疑問点と申しますか、教えていただきたいことがございます。実は神戸も今、海外ネットワーク、同窓会ネットワークの構築ということをしてしておりますが、こちらは見事にそれをしておられますね。素晴らしいです。ただ、小さいことなのですが、中国であるとか、ドイツはハンブルクでしたか、地名になっていたり、国名になっていたり、なぜそういうふうになっているのか。例えば、たまたまハンブルクに拠点があったとしても、ドイツ福井大学同窓会になっていないというのは、何か意味があるのかなと思いました。

それと、海外の同窓会の卒業生たちの意識をずっとつないでいくのはどのようにしていらっしやるのかなと思っております。メルマガを出すとか、ネットを利用してどうやってつないでいくのか。何かやはりメリットがないと、同窓会を維持管理するというのは大変です。それを、もしお一人とか二人でやっていらっしやるのでしたら、取りまとめるのもすごく大変なことだなと。次々増えていくわけですからね。

大まかですが、私の方からは以上です。

(中島) 今のお話に、ちょっと説明を付けさせていただきます。大きく3点あったかと思えます。まず同窓会のネットワーク構築についてですが、支部を設立するときの基準というのは、もちろん帰国留学生の数です。やはり何人かいないと支部といえませんが、今まで一番少なかったのが台湾ですかね。台湾の支部大会のときには4人しか来なかったのですが、多かったのは西安支部で、支部設立大会には34人来ました。ですから、支部設立大会をやるときに何人か集まらなければいけませんので、母数が多いところをまず優先しています。

つぎに、支部の名前ですがけれども、原則は、小さな国は全部国名なのですが、ハンブルクだけが例外です。ほかは韓国支部、インドネシア支部、タイ支部と全部なっています。中国はあまりにも広いので、西安支部で34名、上海支部で21名、北京支部で17名と

か、支部大会になりますと大体15名以上が必ず集まります。特に本学の帰国留学生は、西安と北京と杭州と上海などに集中していますので、そこに順次作っていったという感じですか。

それから意識のメンテナンスとメリットの問題ですね。同窓会というのは、一般的に時々集まってパーティをするぐらいしかないというのが普通ですよ。そういう同窓会というのは必ずしぼんでいく運命にあると思います。それをメンテナンスするという意味で言えば、やはりそこにメリットがなければいけないというのがあります。メリットはどういうところから生まれるかと言いますと、例えば韓国の同窓会と中国の同窓会で、どちらにメリットがあるかと言いますと、当然中国の同窓会にはメリットがあります。韓国はすごく発展していますので、日本とつながっているメリットというのはやはり弱いんです。実は前の勤務先で世界45カ国に65ぐらいの同窓会があったのですが、一番盛んなのはネパール同窓会、スリランカ同窓会、インドの各支部などでした。何かの活動をやって、日本とのコネクションがすごく生きるというのは、やはり途上国でないと難しいという気がします。活動の内容によりますけれども。

いずれにしても、意識をメンテナンスするためには、何か活動をやらなければいけないと。これまで、各同窓会支部が何か会合をやるときには、基本的にこちらから誰かが行くことにしています。センター長が行かれたこともありますし、何人かで一緒に行ったこともあります。今のところは事務職員と教員が必ずペアで行っています。そうやって行くことによってつながり、かつ、支部大会開催の案内をする過程で、昔の人とかがいっぱい掘り起こせるのです。これが一つ。

もう一つは、帰国留学生のメールアドレスを400ぐらい持っているのですが、その人たちに「A happy new year」とか必ず発信しますし、どこかで地震があったり、何かあったら必ず「Are you all right?」と、そういうものを必ず発信しています。そうしますと、みんなからばーっと返事が来ます。そういうこととか、例えば福井の昔のアルバイト先の奥さんが、昔の同窓会のメンバーたちに連絡を取りたいので教えてくれといったときに、それをつないであげるとか。そういうこともやっていますけれども、一番のメンテナンスのポイントは、基本的に数をやらなければいけないと。そういう意味で、今年度は上海支部ミッションが来ましたが、来年度は西安支部ミッションが来る予定だし、今はハンブルク支部がユネスコからお金をもらって日本に来たいという話が出ています。そういうことをやって、それぞれの支部の活動を「こころねっと」に載せて発信して、あなたたちもやりなさいよというような発信の仕方しかないかなと思っています。

(瀬口) それを先生お一人でなさっているのですか。

(中島) まあ、事務の人と協力しながらです。

(若) 留学生センターとしてやっておられるわけですか。

(中島) そうです。センターとしてやっています。

それから、センター内のネットワークの件ですが、第1点は、今はみんなの研究室がばらばらにあるので、なかなかネットワークだとか連携は難しい。ただ、毎月1回、専任会議はやっていますので、そこで情報を交換しています。

第2点は、日本語教育を専門にしている人と、交流とかを専門にしている人が、現在4対1ですが、部門間の共通の話題というのはなかなかできにくいという側面も少しはありますね。一方、事務の方とはほとんど毎日電話でやりとりしていますし、大体週に2～3回は国際課職員が私の部屋に来たり、私が行ったりして調整していますから、事務とはすごく連絡を取り合っています。

(瀬口) 共通の話題がないというようなことを少しおっしゃいましたけれども、学生を見ていらっしゃる、先生はもちろん授業を随分担当していらして、学生の顔を見て大体分かりますね。でも、日本語の先生方も、皆さん顔を見ていらっしゃるわけで、先生方から、いや、ちょっとおかしいなとか、そういうのはありますよね。

(中島) そういうのはあります。日本語教育担当教員から、誰それがちょっと顔色が悪いとか、泣き出したとか、こういう問題があるからちょっとフォローしてくれとか。基本的には、私のところに皆さんが情報をくれることになっているのです。それほど多くないですけども。

(瀬口) それと、しつこいですけれども、どうしてドイツだけはハンブルクなのですか(笑)。

(中島) ドイツは、実はハンブルク大学という協定校がありまして、ハンブルクにしかほとんど帰国留学生がいないということがあります。

(瀬口) でも、増えていった場合とか、名前が困りませんか。

(中島) そうですね、そうしたらまた名前を変えないといけないかもしれませんね。現在、公式名称はハンブルク支部ですが、向こうでは実は「越前会」という名前を使っています。ですから、向こうからは「越前会」として私にメールが来るのです。最近、ハンブルク大学との学生交流事業を計画し、ユネスコに400万円の助成を申請する作業をしていますが、メールはすべて「越前会」会長名で来ます。

それから、派遣の件ですけれども、従来、日本人学生の海外留学がほとんどできてなくて、年数名しかいません。先ほど入学式などでアナウンスした方がいいのではないかとおっしゃった件ですが、実は、来年度の新入生オリエンテーションから、時間を特別に設定して、海外留学説明をする予定になっています。国際課の川村さんという人が、留学経験もあって、派遣を一生懸命やってくれています。

もう一つは、日本人学生との交流はやはり一番弱いですね。今は主に「国際交流ラウンジ」というのがあって、毎月第1、第3、第5の水曜日の夕方、日本人と留学生が集まってテーブルを囲みお茶を飲みながら1時間話をするというのが、日本人学生との一

番大きな交流行事です。それからもう一つ大きいのは、スポーツ大会です。しょっちゅうスポーツ大会をやっていますので、そこに日本人が来ると。一緒に汗を流すと言いますか。

ただ、今は、留学生との交流を目指す日本人学生のボランティアサークルみたいなものはありません。ユネスコクラブとか、いろいろあるのですが、留学生との交流はそれほどありません。ですから、おっしゃるように、日本人学生のサークルを立ち上げる必要があるかと思います。現在は、日本人学生との交流窓口としては、大学生協の学生組織である SOSEN 部だけです。「国際交流ラウンジ」も SOSEN 部と福井大学留学生会が共催する形になっています。SOSEN 部の担当学生が、毎回日本人学生に参加を呼び掛けたり、生協の予算で生協からお菓子を用意したり、会場の準備、運営などをやっています。ですから、留学生と交流しているといえますか、今は実際に動いているサークルは大学生協の SOSEN 部だけです。また、SOSEN 部は、日本人と留学生両方を30～40人集めて料理教室をやったり、餅つき大会をやったりしますが、ここ1～2年はやっていません。前はよくやっていたけれども。

(若) 鳥取にも IFA (International Friendship Association) という学生のサークルがあります。部員は、50～70人います。彼らが留学生の引越しの手伝いやピクニック、ハイキング、さらに授業の指導などの支援をしています。国際交流センターで事業を行う場合も必ず IFA には声を掛けます。必ず、10人単位で学生がスタッフとして協力してくれます。

(瀬口) 実は学生が育つのです。先ほども申しましたが、日本人の学生に対する良い刺激なのです。ですから私も自分自身が楽をしようという意味ではなくて、学生たちにやってもらう。自主的に随分やってくれます。留学生と一緒に何か物事をするときに、企画の段階から一緒にやらせるということですが、出来上がったところへ日本人学生を呼ぶのではなくて、一緒に苦労させる。企画の段階からずっと一緒にやらせて、困ると、どうしようと一緒に考えることで友達になります。特に工学部の学生さんというのは、どちらかといえば寡黙な方が多いですから、何を話せばいいか分からない。「お名前は?」「お国は?」「専門は?」と聞いたら、そこで会話がストップするのです。その会話を続けさせようというのが、先ほどの学生サークルの受入れサポート、登録ツアーです。研究室の中はそういうふうになっているかなと思いますけれども、それ以外の生活の部分でも一緒に知恵を絞って、何かものを作り上げていくという仕組みを作っていると、派遣にも役に立つのではないかと思います。刺激を受けた学生たちは、どんどん短期や長期で交換留学とかに行ったりしています。最近、見ないなと思ったら、どこか海外に行っていますよ。

(中島) これからの課題として、おっしゃるように、留学生との交流を目的とした日本人学生のボランティアサークルの立ち上げをやりたいと思います。現在国際課の方で、新入生全員に指導教員推薦のチューターをつけ、市役所登録等生活のフォローや日本語学習支

援などやってもらっています。また、この4月から、留学のための英語のコースを予定しており、20名ぐらいを二クラスに分けて TOEFL 対策を開始します。このチューターや留学英語コース参加者等を軸にしてボランティアサークルを立ち上げたいと思います。

(若) センターの専任会議が月に1回ということですが、少ないような気がしますが・・・センター会議であれば、日ごろの身近な話題について30分でもいいですから、顔を合わせる機会がもっとあった方がお互いの状況がよく分かるのではないのでしょうか。

実は鳥取大学では、毎週やっています。特に議題はなくても集っています。また、議題によっては、係長や課長以外にも、部長にも参加していただいております。必要な場合には、学生課の職員にも参加を求める事もあります。鳥取大学の場合、センター長が部局長会議や教育評議会のメンバーですので、センターの動きを全学の委員会で直接伝える事が出来ます。直接、学長や担当が異なる理事にも問題点を伝える事も出来ます。

(中島) 専任会議は今尾先生が主宰しています。

(若) 月に1回定期的にやるのもいいのですが、わずか5人ぐらいの組織ですからもう少し頻繁に顔を合わせて情報交換というようなことはできないのでしょうか。

(瀬口) その月に1回というのは、いわゆる教授会ですね？

(中島) いいえ専任会議のことです。教授会は別に学部別にあり、私たちもそのいずれかに所属しています。

(今尾) 当初、センターが設立する前の年は毎週、研究室で集まってやっていました。センターが正式になったときからは、センター専任会議を月に2回、隔週でやっていました。センター設立当初というのはすごくいろいろなことがありますので、やはり月に2回ぐらいは必要だったのかなと思います。月1回になったのはこの2年ぐらいです。決まったものについては、専任会議で取り上げます。日本語教育部門はしょっちゅういろいろなことがありますので、その都度集まって相談していますが、みんなで集まるというのは、なかなか時間を調整するのが大変です。

(中島) 若先生のお話を伺っていると、多分センターの役割がかなり違うと思うのですが。例えばセンターがセンターとして、いろいろな COE とかを主導し、提案を出すとか。

(若) いえ、そこまでは出ません。各教員が考えている計画や実施している授業についての相談、例えば、現在計画している留学生の学外研修への協力要請などです。センターに所属する教職員が顔を合わせるということによって、共通意識や相互理解が深まるという事が最も重要な事です。毎週金曜日の10時40分になると全員集まってきましたが早いときは10分ぐらいで終わってしまいます。1か月に1回というのは、鳥取大学の現状から

見れば、少し疎遠になりそうな感じがします。

(今尾) ただ、そのときしか会わないということはありません、もう毎日のように……。

(若) 全員が一堂に顔を合わせるというのが大切ではないかなと思いました。  
そこに、センター長は出られるのですか。

(中川) はい。時間があるときは出ています。

(若) そこが大事なポイントだと思います。センター長が現場の教職員の意見や考えを直接聞くことが大切だと思います。文書による報告とはまた違って、生の声を聞くことが重要ではないかと思います。

(中川) 今、8割ぐらいは出席していると思います。

(今尾) 月1回の専任会議の話です。今、先生がおっしゃっているのは、毎週1回が望ましいという……。

(若) 学内の体制そのものを変えないと必ず出席する事は難しいのが現状ではないでしょうか。

(三浦) みんなで会って、センター長も一緒に話すということですね。

(中島) 金沢大学は？

(三浦) (そんなに頻繁には) していませんよ (笑)。

(瀬口) 神戸は教室会議というのを月2回していますよ。そこでは、いわゆる教授会といわれる教員会議に上げる手前の話とか、日常的な話をして、毎回、議事録も取っています。

(三浦) そうそう、私たちは月に一度は必ず打ち合わせ会とやってやっています。結局、個人的にいろいろな人と話したりはするのですが、よく考えてみると、みんなで会うということは、教員会議、つまり、教授会ですね、それと打ち合わせ会と、月に2回会っているのですが、その打ち合わせ会というのをやはりするべきだと思っています。

(膽吹) センター設立当初からなのですが、月1回の会議をやるのでも、それ以外に、例えば現在でしたら共通教育に関してはどうしようということで、ワーキングをやっていたり、そういったワーキンググループというのが毎週のようにあります。これでした

ら、自己点検評価ワーキンググループ、次は外部評価、そのたびに実際4人が顔を合わせるわけです。結局それが、先ほどからおっしゃっている、顔を合わせるといふことと等しいと思うのです。ですから、殊更に毎週金曜日といふことを上げなくても、既にそういう形であれば、なされていると私は思っております。

(若) 大切な事は、共通認識を持って、お互いにどのような意識で仕事をしているかといふことが分かればいいわけです。さらに、何か決定するときに全員が関わって物事を進めていくといふ情報の共有です。そういうことをやっていかないと、そのうちだんだん意識が離れてしまい、良い組織にならないのではないかと思つたので、お尋ねしました。

それでは、最後に広部先生の担当の分野ですが、本日はご欠席といふことですので、広部先生に代わってお尋ねいたします。広部先生の報告書を読ませて頂きましたが、やはり教育現場からのご指摘であり、教育に特化したようなご意見でした。

まず、福井大学には中国人留学生在が留學生全体の6割を占めているにも拘らず、日本語と英語以外の言語のホームページがありません、それ以外の言語での対応はどのようになっていますか、といふご質問です。

次に、学生支援については、私費留學生が多いので、経済的な支援援助が必要ではないかといふご指摘、さらに、研究については、少し研究論文が少ないようなので十分な評価は出来ないといふ内容だと思つます。

社会貢献については、ここが広部先生の専門分野ですから、様式Bに詳しく書いてあります。資料を見ていただいてコメントされているようです。例えば、通訳や小学校への留學生の派遣及び地域の国際理解教育への協力などは、殆どの大学でも実施している事であり、特に福井大学として特徴のある社会貢献活動は見当たらないのが実態のようです。

改善を期待する点としては、あくまでも学校現場といふ観点から、もっとよく分かる情報が欲しいといふようなご意見でした。これは我々にとつても同じことです。地域への発信をどうするかといふことは、なかなか難しい問題です。県庁の広報や公民館及び教育委員会などに情報を流すのですが、これらの情報が学校現場にまで届いていることは少ないだらうと思つます。

それで、広部先生のご意見に関係してお聞きします。留學生センターが実施されている地域貢献事業は、主に地域からの要請を受けて行っているものなのか、センターが自発的に働き掛けて実施されているのでしょうか。

また、学校への留學生の派遣は、例えば単発的か定期的に実施されているのでしょうか。また、それはシリーズとしてプログラムを組んで実施されているのかといふ点についてもお聞きいたしたいと思つます。さらに、学校への留學生派遣事業も毎年同じ学校に派遣しているのか、年により派遣先の学校が異なっているのか問う事にも関心があります。この点、如何でしょうか。

それから、改善を要する点に関してですが、留學生交流推進協議会の在り方と活用については、恐らく苦勞されていると思つますが、ここをうまく活用すれば、かなり地域

との交流が楽になるのではないかと思います。留学生交流推進協議会の活用については、いかがお考えでしょうか。

後は、地域の国際交流関係のボランティア組織との関係です。地域にも多くのボランティア組織があります。これらの団体と随分多くの事業を実施されているようですが、これらの組織との連携状況についてご説明いただきたいと思います。

(中島) まず最後のボランティアの件ですけれども、福井には大きく分けて二つのタイプのボランティア組織があり、私たちはその双方と連携しています。一つは日本語教育のボランティア、もう一つは国際交流活動をしているボランティアです。日本語教育活動をしている県内約15のボランティアグループとは、2001年から年に4回ぐらい集まって、「日本語教育ボランティアネットワーク連携会議」という名称で、連絡会議をずっとやっています。最近では桑原先生がそこで日本語教師養成講座をやったりとか、その連絡会議のコーディネータをするとかやっています。そんなわけで、日本語教育という面では、もう7年ぐらいずっと連携活動をやっていますし、これからも続けていく予定です。

もう一つは国際交流ボランティアで、一つはインターナショナルクラブというところがありまして、それは日本語教育とか、世界各国の語学教育もやっていますし、田植え会とか、よさこい祭りダンスチームとか、餅つき大会とか、各種パーティなど、いろいろな活動をやっています。それからもう一つ、もうちょっとアカデミックな感じのボランティアグループ「インターナショナルさかい」というのがありまして、これは男女共同参画とか、かなり堅いテーマについて、シンポジウムや国際理解講座などを再々やっています。このような国際交流ボランティアグループと連携して、講師を派遣したり、参加者募集に協力したり、こちらのシンポジウムに招待したり、パネラーになってもらったりです。これが最後の4点目です。

第1点目「留学生の派遣」の件に戻りますと、「留学生の派遣」をこちらから企画してやっているか、地域からの要請でやっているかという点、実は地域からの要請でやっています。ただ、こちらとしては、はっきりした目的を持って派遣しています。昔はパーティなどに招待され、ごあいさつを交わして終わりというものでしたが、やはり自分が社会に貢献したという満足感が一番大切なので、そういう貢献の満足と国際理解・交流というものを推進するためにやっているのです。現時点では、地域からの要請でやっていますが、JICAと福井県国際交流協会が共催でやっている、ハローワールドという出前講座では、私が初年度からずっと審査員として関わり、年に十コース以上実施しています。大学としては、留学生派遣で協力しています。これも小学校がハローワールド事業の中で、派遣を要請してきますので、こちらはあくまでも要請によってやっているということになります。

次に、シリーズなのか単発なのかという件ですけれども、基本的には単発です。ただ、もちろんシリーズでやることもあります。例えば、丸岡町というのがありまして、そこはALTを活用して小学校の英語教育をやっています。ただ、現在福井県内のALTの数は25人ぐらいで少ないし、たまにしか来てくれない状況です。ですから、留学生に毎週来てほしいというわけで、丸岡町教育委員会と年間契約をして、3、4年間、5、6

人の留学生を英語教育アシスタントとして派遣しました。教育委員会が年度予算に基づき実施していましたが、市町村再編の結果、教育委員会も変わって終わりました。

もう一つは、「湊インターナショナルデー」というのがありまして、湊小学校がここ5年ぐらい、外国人を40名ほど招待し、全校生が日本語禁止、英語しかだめという形で、各種活動を終日実施し、そこに毎年10名以上留学生を継続して派遣しています。また、それと同じものを啓蒙小学校が2年前から続けています。このように定期ベースでやっているものもありますが、大体単発の派遣です。

それから3番目の、推進協議会の有効活用ですが、現在はあまりなされていないと思います。この前ちょっと申しましたように、いろいろな活動をやるときに、共催者になってもらうとか、または情報を流すという感じで、具体的にここを生かしているという活動はないと思います。

(若) 留学生交流推進協議会ですから、恐らく学長が議長になっておられるはずです。それを有効活用していないどころか、実は留学生交流推進協議会を持て余している大学が多くあるようです。留学生交流推進協議会は文部科学省の指導で組織されたものですので、組織の規模が大きく実効性に乏しいのが現状のようです。福井大学ではどのようにお考えでしょうか。

(中島) 今は、「留学生だより」というのを発行して、県内諸機関のいろいろな活動を紹介していますが、主体的な活動というものはやっていません。

(中川) 参加団体の交流は行われています。推進協としての活動というわけではないけれども、推進協に参加している個別の各団体と福井大学の連携とか、そういうのは・・・。

(若) 結局、アイデンティティーの問題があり、「ロータリークラブ」や「ライオンズクラブ」は、そもそもあまり連携しない組織です。それぞれの組織独自の事業として実施したいと言う意識がとても強いと思います。このため、留学生交流推進協議会の一員という意識より、それぞれの組織としてのアイデンティティーが高いのが現実ではないでしょうか。留学生交流推進協議会を動かすためには、もう少し大学から積極的に働きかける必要があると思います。これまでの経験によれば、実際に働きかけを強めるとそれなりの動きは出てくるようです。しかし、そこに至るまでにはそれなりの手間暇が掛ります。この点についてのお考えをお聞かせ下さい。

(石川) 今のところは、必要最小限の活動という感じです。

(若) ただ、大きな組織であり、文部科学省も関与していますので、おざなりにできません。留学生センターとしてはやはり、留学生を抱えている部署でもありますので、その活用が実現できれば、一番メリットがあるのではないかと思うのですが・・・。

(中島) 数年前までは、毎年、推進協の方で留学生の生活実態調査をしていました。こんな分厚いアンケートです。それは印刷配布しているのですが、今は隔年になりました。それから、健康保険の補助とか。でも、あまり主体的な活用は……。これから検討します。

(若) 是非検討してください。大学コンソーシアムについての報告はありますでしょうか。

(中川) 大学連携リーグというのは作っていますけれども、いわゆるコンソーシアムとしての活動まではいいないです。

(若) エリアとしては福井県内ですか。何校が入っていますか。

(中川) 何校入っているのですかね。大学が全部入っていますから8校ぐらいですかね。

(石川) 私立、短大等全部、小中高を除いたやつですから、全部で10校ぐらいでしょうか。

(若) コンソーシアムと留学生交流推進協議会は実は動かない組織です(笑)。しかし、これからは何とか動かさないといけないと思います。特に大学コンソーシアムを動かさないと、今後、外資の導入も難しくなるかもしれません。それは、コンソーシアムとコンソーシアム間での交流事業に対する支援と言う形態の公募が増えてきているからです。こちらはリーグと言っておられるようですが、この充実を真剣に検討して行く必要があるのではないのでしょうか。

鳥取大学ではコンソーシアムを国際交流関係で動かしています。国際交流センターが動く事により、大学全体としてコンソーシアムについて真剣に考える機運が出てきました。現在、鳥根大学と鳥取大学で語学研修プログラムの相互乗り入れをしています。鳥根大学のプログラムに鳥取大学の学生が参加していますが、その逆も行っています。また、コンソーシアム行事としてスキー研修も行っており、このような活動の打ち合わせのため、毎年2回から3回程度、関係者が集まり、いろいろと協議を行っています。

(中島) 国際交流センターとしてでしょうか？

(若) 国際交流センターとしてそういうような事業を実施する事で、次第に学内での評価を受けるようになりました。単独の組織として動きも重要ですが、組織同士が連携して具体的に動く方が評価も高まりますし、社会貢献事業としても、もう少し違う活動ができるのではないかと思います。

(中島) 先ほど瀬口先生から他大学とのネットワークという話が出ていましたが、やはり同じようなことですね。留学生センターとして、国内の他の大学とのネットワークで何かやっていることは現在ありません。

(若) 一番大切なのは、大学間コンソーシアムや留学生交流推進協議会です。これらを何とか動かすことによって、大学間の連携が具体的に可能となります。とにかく、何か事業を実施しようとするれば、関係している大学が集まって話し合いをしなければなりません。まず、担当者同士の話し合いから始められたらどうかと思いました。

(中川) 何か実行部隊がないと、全く動けない。推進協を見て、各界のトップが集まって、はいはいで終わってしまう。大学連携リーグも、学長だけで集まって、仲良し会ぐらいでやっているのかなという感じがします。ですから、その下に実働部隊を作らないと駄目ですね。

(若) ぜひその方向で動いて頂きたいと思います。もし、可能であれば、鳥取大学との連携も考えていただければありがたいのですが……。鳥取大学と福井大学は離れているようですが、鳥取大学の西隣は島根大学で、東隣は、実は福井大学なのです。兵庫県北部や京都府北部に国立大学はありません。若狭湾を越えたら福井大学です。鳥取大学は西の兄弟は島根大学、東の兄弟は福井大学と思っています。(笑)。兵庫県北部と京都府北部は大学の空白地帯なのです。国公立大学もちろんありませんし、規模の大きな私立大学もないのです。

(三浦) 福井大学の隣は金沢大学ですね(笑)。

(若) そう、金沢大学です。最初は国際交流に関する福井県内の大学間連携を具体的にやって頂き、次に、金沢大学との連携も考えて頂ければいいのではないかと思います。ここで、休憩とさせていただきます。

(今尾) では、第1部終了ということで、10分ほど休憩します。

## 2. 第Ⅱ部 総合的評価

(今尾) では、2部を始めたいと思います。

(若) 最初に、短期留学プログラムは非常に素晴らしい試みだと思います。さらに、様々なネットワークの構築と留学生同窓会組織の結成などは、他の大学の模範となるような事業ではないでしょうか。特に、最近、多くの大学で問題となってきている大学院生の確保には、非常に貢献しておられると思います。大学院生の確保、特に博士課程の学生の確保が地方大学にとっては、非常に難しい状態になってきております。

(中島) 一昨日ぐらいの新聞にも載っていましたね。

(若) 福井大学で実施されている短期留学プログラムに参加した学生は、主に修士課程まで

ですか、博士課程まで進学しますか。

(中川) ドクターコースは留学生のためのドクターコースという感じですから、留学生が減れば、もう定員割れをすぐ起こします。

(若) そういう意味でも、この様なコースを今後充実させる事が大切です。鳥取大学も是非参考にさせて頂きたいと思っております。

(今尾) 今、短期プログラムというのは減っていく傾向にありますか。一時、短プロ、短プロと10年ぐらい前は言われて、結構いろいろな学校でやっていたみたいですけども。

(若) 短期留学プログラムの目的が大切だと思います。学部生段階で福井大学に来て、英語で授業を受ける。その間に、福井での生活環境を知り、人的環境も構築できますので、修士課程への入学時に生活環境は出来上がっているわけです。修士課程において、研究を継続していく事が出来ればとても都合がいいです。今後、さらに新しいスタイルの教育スタイルを考えてゆくことが定員確保のためにも重要です。特に博士課程です。修士までは日本人学生も数多く進学しますが、博士課程に進学する学生は少ないですので、留学生をいかに確保するかということを実際に考える必要があります。

(三浦) ドクターが留学生だけになってしまって・・・。

(若) 多くの地方大学では、そういう状況ができています。

(中島) ただ、最近是中国での就職がすごく厳しいという状況があるからでしょうか、浮き足立つとか、早く就職したいという意識が感じられます。修士の留学生はほとんど進学せずに就職する人が多くなりました。今年も30名ぐらい、留学生の就職が決まっています。ですから、大半が博士に行かずに就職してしまうという感じですね。あまり就職を推進するとよくないとか(笑)。

(若) 文部科学省は留学生の国内就職を推奨しています。

(中島) 他に、何か質問などあればどうぞ。

(瀬口) 教室の確保とも関連があるのですが、工学部の一番奥の部屋に、コンピューターがずらっと置いてあって、学生の談話室になっているところがありましたね。あそこの稼働率はどのくらいですか。そして、開室の時間が8時半から夜の9時まで、カードで出入りできるということでしたね。

(中島) 大きく三つあると思います。まず、稼働率はそれほど大きくないと思います。あそこ

を利用する人たちは、母国とのメールのやりとりが一番多いですかね。それからインターネット。研究室のない学生たちもいますので。

それから、特に多いのは建築の学生で、課題の設計図を描いたり、模型を作ったりとか、徹夜で宿題に取り組んでいる学生たちもよくいます。ですから、そういう宿題をやるという学生たち。

もう一つは、国際交流ラウンジとかビデオショウなど、毎週水曜日は何か活動をやっています。それに、歓送迎会とか各種パーティも。それから来年度から実施する「留学のための英語」のクラスも、一つはあそこでやることにしました。留学生と日本人学生との接点を設けられるし、それと会話をやるにはすごく雰囲気がいいんです。今も「はじめての会話」という授業は、受講者は5～6名ですが、ラウンジでやっています。

ですから、全体的な稼働率からいいますと、まあまあかなと思います。

(中川) 今言っておられるのは、総合情報処理センターの端末室ですか。

(中島) いえ、ラウンジのことですよ。

(瀬口) ラウンジというのですか、この間、説明をしていただいたところです。

(中川) 留学生ラウンジですか。

(中島) あそこは国際課の方でカードを留学生に配布しています。

(中川) あそこはいつでも入れるのではないですか。

(中島) はい、実は、土日も。

(瀬口) 管理上、危ないことはないのですか。危ないような気がします。

(中島) そうですね、何か事故、事件が起きたら、ちょっと困ります。

(瀬口) 神戸大学も以前、学生がNASAを攻撃したとか、噂を聞きました。それは大学としては管理の甘さを露呈していることで恥ずかしい話ですよ。

(中島) 女子学生などには時々注意しますけれども。危ないから早く帰ってくれと。

(瀬口) いえ、そういう話ではなくて(笑)、コンピューターの不正アクセスとか。

(膽吹) コンピューターを使って、勝手にダウンロードとか、ウイルスとか、アタックするとか。

(中島) 実は今、情報処理センターからクレームをいただいているのです。一つは SKYPE を使わないようにということ。学外の不特定多数の IP アドレスに対して アクセスをしようとしている形跡があるかといって、2～3回チェックに来ました。

(瀬口) それは神戸でも、かなり神経を尖らせて厳しくしています。ですから、私はそれがすごく、前回もお尋ねしましたがけれども、気になっていることです。

(中島) 実は JAFSA のメーリングリストで聞こうかなと思っているのですが。SKYPE は皆さんの大学ではどうなっていますかと。禁止していますか。禁止してくれと情報処理センターから言われていますので。あれで、音声でチャットをやっているのですが・・・。

(瀬口) 音声チャットはセンターの中ではしていませんけれども。

少し話が違うのですが、教室の確保ということで、今、その談話室で英語の授業をなさるということをおっしゃっていましたが、神戸大の留学生センターにコンピューター室というのがあります。しかし、午前、午後とも結構授業で詰っています。そして授業で使わない3時から5時までは学生に開放しています。

それ以外、別の部屋にもパソコンは置いてありますから、パスワードさえ入れれば、いつでも使えるようにはなっています。しかし、コンピュータ室は、授業優先です。ですから朝8時半から夜の9時まで開放とは、すごくゴージャスだなと思いました。

(中島) そうですね。ほとんど授業は、今のところは1週間に1回しか使いませんから。

(瀬口) ですから、学生が自由に使えるのは、学生にとっては非常に良い環境ですけれども、一方で、教室がないと苦労していらっしゃるのでしたら、時間で区切って、コンピュータを使って授業をなさることもあるでしょうし、使われなくてもパーティションで区切って授業もできるのではないのでしょうか。

実は神戸大学も、留学生センターができたのは、93年なのですが、150平米の仮設でした。そこには、留学生課と他には教室が二つだけだったのです。その時、留学生はすでに500名以上いましたから、教室の確保にはとても苦労しました。それでとにかく教養の建物の中に教室を借りる形で授業をして、また、とにかく目立つようにいろいろな行事も行い、実績を作ってそれを常に学長に機会を見つけては、報告をしていました。そして、とにかく建物がほしいと。もう、私たちもなにかのきっかけを見つけてはしょっちゅう上に話しに行きました。概算要求でトップに上げてほしいですからね。現場で苦労しているということを知っていただかないと、ああ、何も言って来なかったら大丈夫なのだろうと思われまますので。それと、なによりも受入れた留学生に申し訳ないですからね。

(三浦) そして、その効果があったわけですね。

(瀬口) そうだと思います。仮設150平米で、本当にひどかったのです。ですから、皆さんが神戸大学に来られたときに、大変でしたねと。地震後の仮設だと思っていらして(笑)。地震前からの仮設だったのですがね。いつごろから教室の整備が整うのですか。

(中川) この中央ゾーンですか。それは分かりません。分かりませんというのは、まず今、新築は、現状ではほとんど認められないのです。ですから、ほとんどが改修です。改修を通して、いろいろ新しくしていくということですので。ただ、今の留学生センターのところ、あれはもともと古いのを改修しただけなのです。工学部の方にあるラウンジというのは、われわれとしては、あれを早くつぶさなければいけない建物だと思っています(笑)。いずれ中央ゾーンの整備をやっていくのですが、結局はお金の問題ですね。そのお金をどこから引っ張り出すかということで、改修であれば、多分文部科学省の予算等、順次計画に従って出していくことはできるのでしょうか、ちょっと何か、それだけでは片付かないような所があります。学生会館なども、こんな改修しても仕方がないという感じですので、やはり建てなければいけないというので、今、大学としては、何か別ルートのお金で、この辺全体を整理しようというふうなことは考えています。

(三浦) やはり、先生方の部屋も分かれていますよね。ばらばらでしたっけ。やはり先生方は固まって、教室もある程度、もう少し増える必要がありますね。使える部屋が増えるというのは教育の質的なものもあって、今、いろいろお話を伺っていると、やはり教室の確保というのはすごく大きな、重要なポイントですよ。それをどうにかしなければいけませんよね。

(瀬口) そうですね。われわれも、7年間は、研究室がみんなばらばらでした。その仮設150平米に、二つの研修室と留学生課があっただけですから。

(三浦) それで、今は部屋がある、建物があるのですか。

(瀬口) 今は、神戸大学百年記念館の建物の中に1520平米の素晴らしいセンターがあります。

(中川) それは法人化前にできたのですか。

(瀬口) 法人化前です。

(中川) われわれも、留学生センターができて、大体全国の傾向を見ていて、7～8年後には建物が建つと前例ができていたのが、法人化で全部アウトになった。

(瀬口) ですから、それができないとなれば、学内のどこかに同居する形でももちろんいいと思います、神戸でもその案も考えましたから。

(三浦) 私たち、金沢大学留学生センターは、実は今年やっとみんな一緒になったのです。一緒といいますか、建物はないのです。建物を建ててくれというのは、ずっと毎年持っていて、お願いしていたのが、もう駄目だということが分かりましたので、何年か前から、もう建物は要らないから、教養棟のワンフロアを私たちにくれというのに変えまして、旧教養の先生たちがまだ残っていたのが、だんだん定年でお辞めになると、そこをだんだんもらっていきまして、それでやっと全員がワンフロアに集まったのが今年です。

(今尾) 教室は？

(三浦) 教室は、教養棟の普通の教室を借りています。

(若) 枠を取ってですね。

(三浦) 枠は取れないのです。教養棟の教室の決定が終わってから、空いているところをもらうということしかできないのですが、でも、一応教室はとれます。留学生センターがお金を出して、教養棟の教室を防音室にするというお金を随分出して、変えて、そこを比較的優先的に使わせてもらっています。1部屋をパーティションを使って2部屋にして、あと1部屋はそのまま、この三つの教室を私たちが優先といいますか、初めからこれは使えるというふうになっていまして、あとのものは、教養の授業が全部埋まったあとの、余っている教室をその学期は使うという、非常にみじめなやり方なのですが、それでも一応、教室は使えますので、それでやっています。しかもその教室は、いつも使えるのではなくて、あっち行ったりこっち行ったりします。

でも、考えてみましたら、日本人学生だってそうしているわけですから、別に不思議はないし、もう一つ良いことというのは、いつも留学生だけで固まっているのではなくて、日本人学生と一緒にになってうろろろするので。授業の教室が移りますので。かえってその方が良かったかなと思います。一応それで、教室のことは我慢しようということになっています。

(膽吹) 三浦先生がおっしゃったように、例えば京都の同志社大学ってありますよね。あそこに留学生別科があるのですが、同志社の学生はみんな「出島」と呼んでいるのです。つまり、あそこには留学生しか行かない、日本人は寄りつかないと。そうしますと、そこが「出島」と呼ばれてしまって、かつてのオランダ人みたいな、そんな感じで呼ばれていると。ですから、おっしゃるとおり、もっと日本人が交わるためには、そういう金沢式というのでもいいのかもしれないね。

(三浦) ただ、何とも腹立たしいのですが、全部教養の授業が埋まってから後の、空いたリストをもらって、「ここ使えますか」というのはとても嫌なのですが、(笑)、一応、三つだけ使える部屋がありますので、それでどうにかやっています。

(今尾) 先ほどの合併授業のお話とも絡んで、合併授業ということであると、どうしてもクラスサイズが大きくなりますから、今の6人とか7人用のセンターの教室では難しくなります。予算削減という長い目で見ますと、中期的と言いますか、今後5年ぐらいのうちに予算がだんだん減っていくと、現在走っている三つのコースは、少なくとも二つを抱き合わせという事態になる可能性があります。実は、そういうことも全然やったことがないわけではありません。予備教育の学生を前期も後期も受け入れていた時には、前期と後期の非常勤予算を確保することができなくて、全学向け、いわゆる補講コースと抱き合わせにしたことがあります。また、予備教育の学生が一人、二人の場合も抱き合わせの授業でやりくりしていましたから、全然考えられないわけではないのですが、抱き合わせということも考えますと、次にクリアしなければいけないのはクラスサイズと教室の確保という話になってきます。

今、ご覧になったセンターの教室、あれができたのはごく最近と言いますか(笑)、新しかったのでお分かりかと思いますが、留学生専用の教室というのは、それ以前は工学部に、ラウンジと反対側のところに一部屋あっただけでした。

それで、教育地域科学部の教室を使ってあちこちでやっていたのですが、先ほど申しましたように、うるさいという苦情がすごく出たのです。それで、留学生センターができたのを機に、少なくともゼロレベルのコーラスがある比較的うるさい初級、初中級の少人数クラスはセンターの教室を使っています。やはり早晚、抱き合わせとか合同の授業というのも考えていかないといけないですよ。

(若) 最初にも言いましたように、福井大学はとても頑張っておられます。鳥取大学よりも、留学生の数も多いですし、留学生への教育や地域との交流などのアクティビティーは本当に高いと思います。ただ、残念ながら、これらの活動が、大学の中でどのような位置付けになっているのかという点が良くわかりません。センター長を中心に学内への発信をもっと強めていかれたら如何でしょうか。

また、これだけ多くの留学生に関わる事業を活発に実施している大学は、他にあまりないと思います。島根大学には残念ながら省令施設としての留学生センターはありませんが、学内施設として国際交流センターを組織しています。福井大学は、省令施設としての留学生センターが設置されており、専任のスタッフも揃っています。250名の留学生を抱えて、これだけの活動をしておられるのに、大学の中で留学生センターへの特別な支援がないというのは、国際化を大学の柱にしていくという方針にそぐわないのではないかと思います。

福井大学の教員がおとなしいのかどうか知りませんが(笑)、事務職員と一緒にあって、センター長を中心にもっと声を出して行くほうが良いと思います。(笑)、センター長も、理事会とか経営協議会とか学長に現場の声を届けて頂き、これだけの実績があること全学的に認識して頂く努力をすることが必要ではないでしょうか。不満があることはあるが、やる事だけをやれば良いというような考えを乗り越えて、これだけやっているのだから、これだけのことをして欲しいと言うような声を出されても良いのではと思います。(笑)。

(中川) 宿題としての案は、どんどん持ってきてください(笑)。

(若) アクティビティーの割には、大学としての留学生センターへの認識が低いのではないかと思います。

(今尾) 多分、いろいろないきさつが……。皆さんの大学でもそうだったと思うのですが、もともとセンターというのは新しくできた組織ですので、そこから新增といいますか、センターとして雇い入れたという教員というのが少なく、もともと学部にいた教員がそちらへ行ったといういきさつみたいなものも……。

(若) それは鳥取大学においても同じです。

(三浦) 何人かは学部から。

(今尾) そういうのがずっとまだ、後を引いていることもあるのだと思います。

(若) 鳥取大学も福井大学と規模が殆ど同じですから、福井大学の留学生センター教員の定員は5名で、内4名が定員の振替、1名が純増で設置されたはずですが。それは鳥取大学も同様です。しかし、何時までもその様な事を引きずっていても良い組織にはなりません。やはり学長や理事などの決断と指導力が必要です。明確な方針を示し、それが実現できるような環境を与えて、具体的な成果を求める必要があります。過去のことを10年、20年と引きずって行っても決して良い結果にはなりません。過去の経緯は、どこかで断ち切る必要があります。それはある意味、センター長の仕事ではないでしょうか。(笑)。

(今尾) それは私たちのあれというよりは。

(若) もっと大きな声出さないといけないわけです。今はそういう時代です。これだけの実績があれば、本当に十分だと思います。鳥取大学の留学生教育は福井大学の足元にも及ばないぐらいです。

(今尾) 金沢大学でも、やはりそうで……。

(若) 歴史が違います。

(今尾) いやいや、ちょっと聞いたところでは。やはり前の仕事も引きずって、今もやっていて、結局センターができて、センターに移行したら、結局前のものが残るから、倍までいかななくても、1.5倍ぐらいにはなったということは聞いていますから、どこでも同じかなと。

(三浦) 仕事の量は増えていますし、それから、私たちも一生懸命声を出しているのですけれども、そしてセンター長も、今のセンター長は非常に良く、いろいろアクティブに働き掛けてくださっているのに、上の方で駄目なのです。聞いてくれないのです。というのがあります。ですから、なかなかうまくいかないのです。

(中川) 具体案になっていないのではないですか。

(三浦) 鳥取大学はいいのだなあ、すごいなあ。声がちゃんと出て、ちゃんとそれが届いているのだなあ。

(若) そういう面はありますが、別の問題もいろいろあります。

(中川) 鳥取大学の方が、もっと具体的な形で要望が大学へ上がっているのです。

(若) 出来るだけはっきり言うようにしています。

(中川) 具体的な提案がされたら、それは大学側としても無視できないですよ。具体的な要望が上がっていないのではないですか。留学生センターを何とかしてくれと言われたって、何をしたらいいのだと(笑)。

(三浦) いろいろ具体的に言っているのですが、私、福井大学は、内容的にはすごく良いと思います。とてもよくやっつけらっしゃると思います。これをもっときちんと、学内のトップの方と上の方ともうちょっと、どういうふうにやったらいいのでしょうか。それは私たちの問題でもありますので、よく分かります。

(今尾) 学内でのセンターの位置付けということを何度もおっしゃっているのですが、まず学内でのセンターの認識が。

(若) 留学生センターが設置された最初は、留学生への日本語教育に対して、非常に誤解があると思いました。日本語なんて、ほうっておけば留学生は自然と学び、話す事ができるようになるのではないかと、ということを平気で話す教員が多くいました。そのときは、必ず「何を言っているのですか。専門家が教える日本語がどういうものか、ご存知ですか。きちんと体系化して理解しながら指導するのです。ただ話すようになる事とは違います。特に、国費留学生に対しては、半年間である日本語レベルにまで教育するということと自然に覚えていくのとは違います。一度、教育現場を見に行ってください」と言っています。本当に留学生への日本語教育への認識が低い教員が多くいます。やはり公開講座をすとか、目に見える活動をするのが一番良いと思います。報告書も作成し、その中に、参加した市民や協力者など、関係者の意見も入れることにより実績の評価と同時に、活動の広報にもなると思います。教育というのは、見えないところで進めてい

くものなので、教育しました、教育しましたと言っても、形が見えないので、なかなか実績を示す事が困難な部分もあります。

(今尾) できて当たり前みたいなのがありますから。

(若) それが問題です。だから、なかなか声が届かないのです。

(今尾) 本当に、認識していただくというのはなかなか難しいと思いましたね。今でもそうかと思ひまして。

(若) 日本人社会の中で日本語を教えるということがどういうことなのかということが、本当に理解できていないのです。

(三浦) 大学の先生方は科学者なのに、何も分かっていません。そういう人が分かるような形で、そういう人に分からせるような報告書を作ることが大事ですね。

(若) もう一つの提案は、鳥取大学の国際交流センターとして、去年から中四国のセンター長懇談会を立ち上げました。これは、平成14年と15年に留学生センターが設置された歴史の浅い大学だけで集まり、それぞれのセンターの現状について話し合い、情報交換や連携事業の可能性について話し合うことを目的とした懇談会です。そこで、アフターと言う意味のAを用いて「A2002」という冠を付けています。これから中国、四国の留学生センターの連携を取るための方策等について事務方も交えて毎年話し合っています。やはりいろいろなアイデアが出てくるのです。文化圏が違うのだから中国、四国地域で何か共同のプログラムを作って事業を実施しようと言う事になりました。次回の懇談会は、愛媛で行う事になりました。

この様な目に見える動きを具体的に実施し、実際に成果を出して行けば、留学生センターが活発に活動していることが、次第に見えてくるのではないかと思います。また、学外に対しても何かアクションを起こしていくというのも大事だと思います。

(三浦) みんなで連携してするという、例えば北陸地区、福井と金沢と富山の連携については、よく私たちが言っているのは、こんなに学生数が少なくなって、非常勤講師料を減らせと言われて、これをどうにかして打開するには、たとえば、教員研修は福井が全部持つ、研修コースは金沢が持つ、日韓は富山が持つというふうにして、分けてしまって、自分たちはそれだけに特化する。それと全学補講をしなければなりませんね。私は前から教員研修は福井大学が全部持ってくれたらいいのではないかとずっと思っているのです。

(若) その様な考えを文科省か三つの大学の学長に提案されたら如何でしょうか。

(三浦) というふうになればいいですよ。そうすれば、福井大学も無理して日韓をやるとい

わなくてもいいし。富山も、日韓が一人来たとか、ゼロだったとか、そういう状況ですよね。ですから、日韓は金沢の分を全部富山に送るとか。

(今尾) 富山は短プロが無いんですよ。

(三浦) 短プロ、ありませんね。

(若) 申し訳ありません。話の内容が評価委員会から少し外れてしまいましたが、お互いの大学の実情を含め、良い話し合いが出来たと思います。

評価するとか評価されるというのではなくて、お互い、留学生と関わる部署にいる教員として、留学生の教育や研究が順調に進むことが大切という共通の認識を持っています。そういう意味で、ぜひ良い評価書を書かせていただきたいと思っております。

いずれにしても、各大学とも同じような悩みを持っていますし、それぞれの大学では特性を生かしながら特徴ある活動を実施されています。各大学がお互いに情報の共有を図りながら、自分の組織の活性化と連携組織との活動により、良い実績を残すことができるような活動を行うことが重要だと思います。

4人の評価委員の力不足のため、ご期待に応えられなかった点もあろうかと思いますが、今後ともよろしく願いいたします。ありがとうございました。

(今尾) どうもありがとうございました。時間どおり終わっていただきまして、ありがとうございます。これで第2回外部評価委員会、委員報告および評価を終了いたします。

これで2回の外部評価委員会を無事に終えることができました。委員の先生方には、本当に多くのご負担をお掛けしたにもかかわらず、快くご協力いただいたことに厚くお礼を申し上げます。

先ほども委員長がおっしゃったのですが、本日のご報告と評価を基に加筆修正していただきまして、最終原稿の方、よろしく願いいたします。

では、これで終わりいたします。

## VI 外部評価実施経過

平成19年5月10日 留学生センター専任会議

留学生センター長より留学生センター外部評価の必要性について説明があり、平成19年度（平成20年2月）に実施することが決定。外部評価ワーキンググループのメンバーを選考（留学生センター専任教員：中島、今尾、山中、桑原、膽吹）。

平成19年5月24日 第1回外部評価ワーキンググループ会議

外部評価ワーキンググループの座長（今尾）および外部評価報告書編集担当（中島）を取り決め、外部評価実施のための年度内スケジュール、外部評価委員の選任について検討。

平成19年6月21日 第2回外部評価ワーキンググループ会議

外部評価委員会の日程、評価項目の選定、外部評価委員の選任、外部評価参考資料の選定について検討。

平成19年7月5日 第3回外部評価ワーキンググループ会議

外部評価の概略日程（外部評価報告書完成期日、外部評価委員会の日程、外部評価委員の委嘱依頼時期）を決定。

平成19年9月27日 第4回外部評価ワーキンググループ会議

外部評価委員4名（若良二委員、三浦香苗委員、瀬口郁子委員、広部正紘委員）の内諾を得、10月末日迄に委嘱状送付を決定。

平成19年10月18日 第5回外部評価ワーキンググループ会議

外部評価日程案（外部評価委員宛委嘱状送付、資料送付、第1回外部評価委員会：施設見学及びヒヤリング、第2回外部評価委員会：報告会）について検討。

平成19年10月23日

委嘱予定の外部評価委員の所属機関に対して、委嘱同意願い文書を送付。

平成19年11月12日 第6回外部評価ワーキンググループ会議

若良二委員の外部評価委員長委嘱、外部評価委員会の日程、調査表（様式A・様式B）の記載項目、第2回外部評価委員会（報告会）のスケジュールを決定。

平成19年11月19日

自己点検・評価報告書等資料を外部評価委員宛送付。

平成19年11月20日

調査表（様式A・様式B）を外部評価委員宛メール送付。

平成19年11月29日 第7回外部評価ワーキンググループ会議

第1回外部評価委員会（施設見学及びヒヤリング）の実施案について検討。

平成19年12月21日

第1回外部評価委員会（施設見学及びヒヤリング）を開催。

平成20年2月6日 第8回外部評価ワーキンググループ会議

第2回外部評価委員会（報告会）の実施案について検討。

平成20年2月28日

第2回外部評価委員会（報告会）を開催。

平成20年4月3日 第9回外部評価ワーキンググループ会議

外部評価報告書の構成について検討。

平成20年6月

外部評価報告書完成予定。

---

福井大学留学生センター  
**外部評価報告書**  
平成15～18年度

平成20年 6 月発行

編集兼  
発行者 福井大学留学生センター  
〒910-8507 福井市文京 3 丁目 9 番 1 号  
電話 0776-27-8021

印刷所 株式会社 エクシート  
〒919-0482 福井県坂井市春江町中庄61-32  
電話 0776-51-5678

---